



センター開設 10 周年シンポジウム 「アジアの日常」 (2023 年度シンポジウムの報告)

Lam Peng Er、青木（岡部）まき、魚住和宏、西井涼子、
中林広一、荒木田勝、石井梨紗子（編集）

2023 年 11 月 18 日、アジア研究センター開設 10 周年を祝して、シンポジウム「アジアの日常」が開催されました。

司会

石井 梨紗子 アジア研究センター所員・神奈川大学法学部准教授

本日は、神奈川大学アジア研究センター開設 10 周年記念シンポジウム「アジアの日常」にお越しいただき、誠にありがとうございます。本日、司会を務めさせていただきます、神奈川大学アジア研究センター所員、法学部の石井梨紗子と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

開会に先立ちまして、神奈川大学学長、小熊誠よりご挨拶申し上げます。

学長挨拶

小熊 誠 神奈川大学学長

今日は、アジア研究センターの第 10 周年記念シンポジウム開催、誠にありがとうございます。10 年という節目、当たりまして、本日のシンポジウムを開催できますこと、大変うれしく思っております。

開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。まず初めに、私の個人の紹介をさせていただきたいと思います。私は民俗学の専攻でございます。民俗学というと、日本研究と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、私は沖縄を中心に、中国、韓国、東アジアの民俗文化を比較しております。私は個人的に、1960 年代の文化大革命、そのころ、まだ私、中学生でしたけれども、その時から中国に興味を持っておりました。大学に入りまして、東京のところには中国映画鑑賞会がありました。当時、1970 年代でございますけれども。その時に、『白毛女』とか『紅色娘子軍』という歴史的な中国映画を見て勉強いたしました。その時には、ご存じでしょうか、中国映画研究の刈間先生、後に東大教授になりました。あるいは白井先生、これも中国映画研究者ですけど、当時私の先輩に当たりまして、その先輩たちと一緒に中国映画を見たりしておりました。

また、1979 年、文革がちょうど終わる時期に、交流留学で 1 年間、香港中文大学に留学をいたしました。その時には、映画で言えば、『小花』という映画が流行って、中国のみんなが見ていた映画です。その映画に私もはまっておりました。その主人公の陳冲という女優はアメリカに行っちゃいま



て、アメリカで有名な女優になっています。あるいは、劉曉慶という女優、私は大好きだったんですね。この女優は、その後、1987年に、『芙蓉鎮』という文革の映画に出ていた有名な女優でした。

私自身は、1980年1月2日、改革開放が始まったその時に、香港から中国に行きました。私より早く中国に行かれた方々もいらっしゃるかと思いますけれども、その時以来、民俗学の調査を中心に中国にはいろいろお世話になっておりまして、50回は優に超えるくらい中国に行ってお勉強させていただいています。本日はそういうことで、中国を中心に、アジア研究のシンポジウムになります。

アジア研究センターは、アジアおよび、アジアの諸地域を対象に、政治、経済、社会、文化、科学技術など、個別学問分野の枠を超えた総合的かつ学際的な研究に取り組んでおりまして、調査研究と学術交流を通じて、アジアの平和と発展に寄与することを目的として、2013年4月に開設されました。このセンターは、所長である、建築学部教授の山家京子先生をはじめといたしまして、本学の文系、理工系の計9学部の教員の先生方で構成されております。文字通り、分野の枠を超えて、アジアに関するさまざまなテーマに沿って、共同研究が進められております。

本日のシンポジウムでは、「アジアの日常」を主題といたしまして、アジア研究の10年を振り返るとともに、これからのアジア研究について視座を得ることを目的としたものと伺っております。近年のコロナパンデミック、そして、ロシアによるウクライナの侵攻、直近では、イスラエルとハマスの紛争など背景にいたしまして、私たちの日常は、当たり前にも今ここにあるものではなく、非常に日常が動いていると考えられます。私たちのかけがえのない日常は、戦争、そして、災害によって、いとも簡単に断たれてしまいます。ありふれた言葉である日常、この日常というのは、私の専門の民俗学でも、日常文化の研究が行われています。この日常ということは、民俗学だけではなく、政治、経済、社会、文化、科学技術の観点から問い直すこと、それは、アジアを再定義する意義深い試みだと言えるのではないかと考えております。

また、本日は、アジア研究を専門にするさまざまな研究機関に所属する研究者の皆さまがご登壇くださると伺っております。学際的かつ先端的な研究の発表と議論の場として、本日のシンポジウムは研究交流が進む場だと期待しております。

最後になりましたが、本日のシンポジウムで活発な議論が交わされ、そして、実り多き会が成功に終わられますよう、お祈り申し上げますとともに、アジア研究センターのますますの発展と、本日までご参加いただいた皆さまのますますのご健勝を祈念いたしまして、私からのご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

趣旨説明

山家 京子 アジア研究センター所長（神奈川大学建築学部教授）

皆さん、こんにちは。神奈川大学アジア研究センター所長の山家です。よろしくお願いたします。本日はご多用の中、本シンポジウムに足をお運びいただき、ありがとうございます。そして、基調講演をお引き受けいただいた、シンガポール国立大学のLam博士、そして、第2部のショートスピーチを快くお引き受けいただいたパネリストの皆さま、どうもありがとうございます。本日はどうぞよろしくお願いたします。

最初に、アジア研究センターについて、簡単にご紹介したいと思います。先ほど学長からもご紹介がありまして、アジア研究センターは調査研究と学術交流を通して、アジアの平和と発展に寄与することを目的に、2013年4月に開設され、今年10周年を迎えることとなりました。これまで15の共同研究が終了



し、9の双書、12のシンポジウム、公開講演会等を実施し、現在、こちらにあります7つの共同研究が進行しております。

2019年末に始まったコロナパンデミックは、アジアのみならず、世界中で私たちの日常を揺るがすものとなりました。コロナ以前、私たちは朝起きて、満員電車に、オフィスに向かい、同僚と机を並べて仕事をし、週末には友人たちと食事を楽しむ、そんな日常を送ってきました。ところが、コロナ禍にあって、ステイホームが叫ばれ、密は避けなければならず、人との会話も画面越しとなりました。当たり前だと思っていた日常が消えた日々であると同時に、今ここにある日常に向き合う時間だったと言えると思います。

コロナパンデミックは一種の災害です。これまでも戦争と災害は日常を断つものとして存在してきました。この10年を振り返った時、日本では、地震や豪雨をはじめとした大きな自然災害に見舞われ、被災地では日常が断たれてきました。そして、ウクライナでは今もロシア侵攻により日常を奪われており、また、ガザ地区でも多くの市民が命の危険にさらされています。私たちの日常、アジアの日常のルーツはどこにあるのか、日常は何によって構成され、また、どのように私たちの前に現れるのか、何が日常を支え、あるいは脅かすものは何なのか、日常はアジアを問い直す一つの視点になり得ると考えました。

私の専門分野、都市計画、まちづくりから、アジアの日常を考えてみたいと思います。まず、日常は私たちの街の風景に現れます。人々の日々の営みは、その土地の風土や歴史を反映して、固有の景観を形成しています。東南アジアのショッピングハウス、韓国のタルトンネ、そして、こちら、今、写真が出ています、アパートの表装など、カスタマイズされた表装などがこれに当たります。これらは、人々のなりわいを含めた日常を映し出したものと言えます。このように、日常を観察し、描写することで、アジアの特質、すなわち、日常を構成する要素、その背景にある歴史、社会、文化的特質が見えてきます。

一方、そうした日常を守る制度、仕組みもあります。例えば、都市計画において、用途地域というのがあるのですが、それは、住環境を保全する、つまり、住民の日常を守る目的で定められています。これらは日常を支える、守る仕組み、裏返せば、日常を脅かす存在に着目するアプローチと言えます。

次に、私が代表を務めます、共同研究グループの主題、アジア都市の生活圏からアジアの日常を考えてみたいと思います。生活圏というのは、およそ自宅から徒歩で移動できる範囲を指します。およそ小学校区ぐらいの広さでしょうか。近年、その生活圏を見直して、充実させようという動きがあります。都市計画コンセプト、15-Minute Cityとか、20 minute Neighborhoodなどがよく知られるところですが、いずれも、自家用車の移動削減によって、脱炭素社会の実現を背景とし、いずれも自宅を中心とした徒歩圏で生活がおおむね完結することを目的としています。これらの考え方は以前からあったものですが、コロナパンデミックにより、いやが応でも自宅周辺の環境に関心が向けられるようになり、注目が高まったと言えるでしょう。

そこでは、利便性だけではなく、居心地の良さも求められています。例えば、20 minute Neighborhoodが求める要素の一つに、Ability to age in placeがあります。その地で年齢を重ねられること、老いを迎えられることを意味します。機能的に、病院、福祉施設があればいいというわけではなくて、おしゃべりを楽しむコミュニティがあって、心を豊かにしてくれる自然環境に恵まれている、そうした生活圏が求められています。

アジア都市の生活圏を考えた時、アジア都市、東南アジアをはじめとして、バイクや自転車の移動が多く見られ、それが日常の風景をつくり上げています。すなわち、アジアの都市固有の景観を形成していると言えるでしょう。アジア都市の生活圏を日常から考える時、まず、日常の基盤となる生活圏を観察し、描写することで、アジアの特質が見えてきます。例えば、自転車、バイクといったモビリティによって、生活圏のスケールが異なる場所もアジアの特質と言えるでしょう。一方、私たちは豊かな日常を支える生活圏を構築する、アジア的計画論、制度についても考えなければなりません。それらは欧米で先行して実践されたものとは手法的にも異なるはずです。このように、アジアの日常を観察、描

写することで、そのアジア的特質を再検討するとともに、それを支え、守る、アジア的仕組み、制度の構築を目指したいと思います。

最後に、本日のプログラムを簡単に説明いたします。第一部は基調講演として、シンガポール国立大学東アジア研究所主席研究員 Lam 博士にお話しいただきます。第二部では、ショートスピーチとして、国内のアジア研究所に所属される研究者の方々に、政治、経済、社会、文化、科学技術の観点から、アジアの日常についてお話を頂きます。学際的かつ幅広い議論が展開され、多角的なアプローチから日常を考え、アジアについて問い直す機会になればと考えています。それではどうぞよろしく願いいたします。

第一部 基調講演

Lam Peng Er 博士 シンガポール国立大学東アジア研究所主任研究員

こんにちは。私の方からまず感謝を申し上げたいと思います。小熊学長、私にお招きを頂きまして、ありがとうございました。それからまた感謝したいのは、尊敬する教授陣の方々です。神奈川大学の教授陣の方々。特に感謝しなければいけないのは、心からの旧友である大庭先生です。彼女は、10年以上前に会ったと思います。シンガポールの日本フォーラムでお会いいたしました。学生の方々も、土曜日の午後なのに来てくださってありがとうございました。



今日の話の概略といたしまして、まず、大庭先生からお招きを頂いた時には、「日常生活のことを話してくれない？」と仰ったわけでありまして。「え？」と思いました。どうやって国際政治と日常生活を一緒にするのか？ でも、真剣に受け取りまして、そして、この考え方に至りました。

まず初めに日々の生活の意義を話したいと思います。「個人的なことは政治的なこと」という表現がございます。日常生活こそ政治そのもの、よろしいでしょうか。皆さま方の個人的な生活というのは政治なんですよ。例えば、ローカルなコミュニティの生活があって、グローバルな重要性に繋がるといって、これが累積的に積み上がっていくということです。

2番目に、私の個人的な体験をいたしましょう。どうやって私が個人と政治のリンクを見つけたかということです。個人のレベルから始まって、地域のレベル、国のレベル、そして世界のつながりを発見したのが偶然の出来事だったのです。神奈川県で始まりました。皆さま方の古いキャンパスがあるところですよ。30年以上の前のことでありましたけれども、私は、あなたのように若かったんですよ。私だって若い時がありました。学長先生は人類学者でいらっしゃいましたよね。私は、コロンビア大学の指導の下に日本の草の根政治を研究しておりました。恩師の足跡をたどって、講演活動などを追って社会運動を研究していたのですけれども、そこで見つけたのが神奈川県でありました。それは後でご説明いたしましょう。

その後に、コーヒーを飲むとかお茶を飲むとか、日常の本当にありきたりであって目立たないことでも、素晴らしい大きな意義があるということをお話しします。そして、それは戦争と平和を分けるものだという事です。とコーヒーとお茶、それからまた戦争と平和はどう関係するのか、後でご説明しますからね。

次に、私たちの日常生活と国際関係に影響がある6つの要素についてお話しします。経済、地政学、人口動態、環境、技術、そして、文化、この6つのドライバーを、私は調べてまいりました。それらが

21世紀の東アジアの国際関係に与えるのは何なのかを考察いたします。

それに続いて、私の主張でありますけれども、東アジアの国際関係と未来を見ました時には、これは、夢のような世界なのか、あるいは、こうなってほしくはないのですが、悪夢になるのか。例えば、東アジアで北朝鮮が核爆弾を撃ち合うということになりましたら、これは悪夢になります。あるいは、5メートル、10メートル、水面が上昇する、そして、温暖化が起こるといこと、それがグリーンランドの氷山が溶けるといことになるのか。ブラックスワン現象が起きるかもしれません。予想できない極端な事象のことをブラックスワンと言います。本当に未知数です。誰も分からないんです。これは、皆さま方と私たちが、たくさんある選択肢から選ばなければいけません。首相が決めることではありません。何百人、何千人という人たちが、私たちの日常生活で、例えば、消費パターンもそうでありましょうけれど、累積的に積み重なっていく決断が世界を動かします。

歴史と国際関係は、王様とか女王様とか、あるいは、ナポレオンとか将軍が動かすわけではないわけです。『ナポレオン』という映画は間もなく来ますけれども、映画の中ではバイアスがかかっているでしょう。伝統的な歴史の本を見たら偉大な王や大將軍が出てきますよね。大帝国が出てきます。でも、それで歴史と国際関係は、それだけで動かされているわけではないのです。個人とその地域社会の日常生活と積み重ねられた選択によって、歴史と国際関係は動きます。

「個人的なものは政治的である」といこと、1960年代から人気のある表現なのですけれども、どうしてこんなことが言えるのでしょうか。特に人気があったのは、アメリカの公民権運動の時です。特に女性たちに人気がありました。皆さま方が、子どもをどこの学校に送るかとか、それは皆さまの家族だけが決めるわけではなくて、そして学校が決めることでもないでしょう。皆さま方の日常生活、皆さま方の選択肢、あるいは、皆さま方の選択肢がないといところは、往々にいたしまして、国家が決めるところがありますよね。大会社が決めますかね。それは決して、皆さま方や家族の決定ではないかもしれない。もっと大きな力が決めることかもしれません。

なぜ私がこれがかかったのかといことなのですけれども、1991年のことでありましたが、私がフィールドワークに選びましたのが、梅沢健治さんの選挙戦でありました。殆んどの人が忘れていらっしゃると思いますけど、1991年は、梅沢健治さんは神奈川県自民党の幹事でいらっしゃったのです。神奈川県担当事務総長でいらっしゃいました。私は1991年の4月の統一地方選挙に参加して取材をいたしました。本当に良い人でした。そして、選挙戦、追ってもいいよといことを仰ってくださいました。よく覚えておりますけれども、その当時、まだ4月に桜が咲いておりました。それから、息子の裕之さんにお会いいたしました。梅沢裕之さんです。日本では本当に王朝的な世襲制度の政治が行われておりますので、国会レベルでなくても、この市議会のレベルでも、県議会でも、王朝式の世襲制度があるわけです。梅沢裕之さんは、その時緑区の市議で、ご自身は梅沢健治さんのお婿さんだと仰いました。健治さんに息子がなかったの、娘さんと結婚して、姓を変えて養子になったんだといことを仰っていました。義理の父の跡を継いだのです。そして、1980年から10年以上、ローカルなレベルで議席を確保し続けていると。これが市議会であったといことなんですよね。その家族はいつも議席を保持しているといことでありました。いずれにいたしましても、今はこの神奈川県議会の議長を、梅沢裕之さんが務めていらっしゃいます。私が若者としてお会いした時、父親が神奈川県自民党の幹事で再選を目指していらっしゃいまして、今は息子さんが父の席を狙って活動していらっしゃいます。

いこと、なんでこんなことがかかったのかといことでもありますけど、私が選挙戦の観察をしておりました時に、事務所で大きなグループが入ってきたのを見たのです。女性の支持者でした。このような旗を立てて、梅沢健治さんに表敬訪問をして、ユニホームを着て。あら、日本の政治が変わっているなと思ったのです。男性しかいないものなのに、女性。全ての国会の議員たちは男性と言ってもいい。しかし、ここに入ってきたのは女性でありました。主婦たちでした。この女性たちは緑の党で、神奈川ネットワークに所属しているといことでありました。そして神奈川ネットワーク運動は、いわゆる生活クラブとい生活協に支えられておりました。生活クラブは東京に始まったものでありまして、緑

区ではありません。1968年に設定されまして、その後には色々なところに広がっていきました。生活クラブの組合の殆んどは主婦でありましたけれども、長野、山梨、札幌にも行きましたね。生活クラブはどんどん広がったわけでありまして、でも、関西はコープがありますので、なかなか逆風が吹いて広がらなかったようです。

いずれにしても、この主婦のグループは何を求めていたのか—横浜の市議会の席を争っているわけがありますけれども—一政策は何だったと思いますか？合成せっけんの禁止ですよ。それが彼らの求めた政策でありました。合成せっけん、これを使って洗濯をしたら環境に悪いということでありました。これは、せっけん運動と呼ばれていました。メインストリームの中堅政治家たちにとっては混乱した議題でした。とにかく、合成せっけんの使用禁止、そして学校での子どもたちの食の安全、そういったものを訴えていました。主要な懸念というのは、日常の生活に関連すること、子どもたちに安全な食を与えるべきであるということ、いじめをなくすということ、そして洋服を捨てずにリサイクルするという運動を進めること、こういったものでした。リサイクルの支援、リサイクルの推進、ごみの分別、ごみのリサイクル、分別、収集、こういったものを求めていきました。さらに男女平等の議題や平和主義などがありました。

大変驚きました。自民党の人たちが、こういった共産党っぽい政策を進めたことに驚きました。大変熱意を持っていました。日常の生活の懸念事項が市議会で議論されることに大変情熱を持って訴えかけられていることが印象的でした。そしてその人たちのアイデンティティーは、平和主義、それからエコロジーの問題にありました。その対象は、地球温暖化や気候変動、そういったものに繋がっていきました。ですので、繋がりはあるわけです。地元の懸念事項が気候運動に繋がっていくわけです。

この神奈川ネットワーク運動の候補者たちに会いました。結局、落選してしまいました。でも、政策を宣伝することができたということでした。また議員の女性にも会いました。ナショナルネットワークです。これらの女性は、地元のネットワークの運動の人たちでしたけれども、長野、千葉、埼玉、札幌、また、福岡、こういった生活クラブが支援する他のネットワーク女性議員にも会いました。この生活クラブというのは、あるキャンペーンをしていました。女性たちに、地元の選挙に立候補して、神奈川ネットワーク運動がしたことと似た運動を起すようにということでした。我々は政治に対してアマチュアです。ただの主婦ですと言ったんですね。しかし、彼らが信じていたことは、一緒になれば違いを生み出すことができる、市議会、そして、県議会、そして、訴えることができる、それがまさに日本の民主主義のエッセンスだと思います。日本の民主主義というのは、ただただ、党の戦いではありません。自民党対他の党の争いではありません。地元の政党、日常生活に思いをはせる政党、そういったものが関わってくるのです。

もう一つ、日本財団が私をスポンサーしてくださって、東日本大震災で被害を受けた地元の人たちと会って欲しいと要請されたことがありました。私はシンガポール出身ですけれども、シンガポールは再建に貢献しております。福島、宮城、岩手、特に私は岩手県の陸前高田と緊密に交流しております。家族が犠牲になった方も沢山いらっしゃいました。市議会の人たち、共産党の人たち、また別の政党の人たち、様々な考えをお持ちの皆さまとお会いしました。

津波の前には、シンガポールという言葉が陸前高田の人はあまり聞いたことがありませんでした。しかし、大きなコミュニティーホールがありまして、シンガポールの国がその復興を支援するということになりました。普段は日本のODAによって支援されている国です。それが陸前高田に行き、コミュニティーホールの再建を助けてくれました。コミュニティーホールは、陸前高田ではシンガポールホールとして知られています。コミュニティーホールの前にはマーライオンが建てられています。私は見てびっくりしました。また、図書館も陸前高田に造りました。私はそこに行ったのですけれども、皆さん、高齢者の方が踊っていました。そこで新聞記者がいたのですけれども、そこの高齢者の方たちと踊りをするように言われまして、踊りました。

そこにいた時に感激したのは、住民の方たち、陸前高田の住民の方たちが生活の再建をしていたことです。下から活性化させて、そして、町を再活性化していたことです。私は、多くの住民、そして特に

若い方、普段だったら東京、仙台で働いていた若者たちが、70%流されてしまった町に戻ってきたわけです。東京や仙台での仕事を辞めて戻ってきたわけです。東京や仙台から、そして、陸前高田に戻りました。その若者たちは農業に携わったり、様々なことをしていました。陸前高田は漁業が強い地域でしたけれども、悲劇の中にも希望があるということです。シンガポールが陸前高田を見つけ、陸前高田がシンガポールを見つけた。これは希望の光でした。シンガポールで陸前高田の展示会があります。そこで農業製品や食べ物、お酒などが売られています。シンガポールで、です。陸前高田の住民の人たちは、日常生活を通じて生活を再建し、日常生活を通じて、津波ツーリズムというものをつくりました。様々な場所から、シンガポールや日本からやってきて、そして、東北の再建状況を観光する、見て回るわけです。

自然災害は日常生活と密接に関係しています。そして、シンガポールと陸前高田の住民の間に関係が築かれました。ですので、シンガポールと陸前高田の市民の関係を考えた時、国際関係とは何か？例えば、これは紛争問題だけではありません。陸前高田とシンガポールの関係、国際関係というのは、心と心の関係です。ですので、国際関係というのは、もちろん政治家同士の問題もあります。戦争、平和の問題もありますが、個々のレベルでは、町と町、日本の町と町の関係、そして、皆さんも神奈川大学にいますけれども、あるいは留学生かもしれません。あるいは国際関係を勉強しているかもしれません。毎日の勉強の中で、こういった国際関係と日々接しているわけです。

来月、12月16日、ボストン茶会事件の250周年になります。ボストン茶会事件とは何でしょうか？皆さん、タイムマシンがあったとして、250年前に遡りましょう。アメリカの植民地だった時ですね。モホークインディアンに扮した植民地時代の反乱軍の方たちがいました。来月が250周年、12月16日が記念日です。アメリカ軍のモホークインディアンに扮した反乱軍が、ボストン港に入ってくるイギリス船籍の船に乗りこみました。そして積み荷の紅茶を海に投げ捨てたんですね。それは、イギリス支配者に対する象徴的な抵抗でした。なぜかという、紅茶に課される税金を支払う代わりに、積み荷の紅茶を海に捨てました。紅茶を飲みたければ税金を払えということでしたので、積み荷を捨てたわけです。

殆どどのアメリカ人は、ボストン茶会事件を考える時、アメリカの反乱の動きだと捉えます。アメリカの独立の革命というのは大変複雑なものですけれども、この歴史を鑑みた時に、ボストン茶会事件というのは、アメリカのイギリス政府への抵抗の動きだったわけです。

それでは、ここで問題となっているものは何か。東インド会社ですね。イギリス議会が、東インド会社にアメリカ植民地への独占販売を認めるということで、この東インド会社はイギリスの会社が所有したわけですが、それが倒産にひんしていたのを救おうとしたんですね。当時はアメリカに30の植民地があったのですけれども、英国議会はそれに課税することで東インド会社を倒産から救おうとしました。

これに怒ったのが植民地です。どうしてロンドンが税金をかけてくるのか、これは消費税みたいなものでありますよね。私たちにどうして課税をするのか、全く代表権はないのに、英国議会から何の相談もないではないかと怒ったわけです。そして、ロンドンはどう言ったか。ごめんなさいね、はい、これインドの会社なんだものね、インドの会社がこの税を課すのだからねと言い逃れしようとしたわけがあります。

いずれにいたしましても、私はちょっと調査をしてみました。そして、分かったのは何かと言いますと、この1776年が革命でありますけれども、その少し前、1774年とか1775年とか、アメリカの植民地の3分の1というのが、1週間に2杯の紅茶を飲んでたということなのです。多くのアメリカ人は週に1杯、2杯の紅茶を飲んでた。だからイギリスの議会は課税した。中国の絹のようだとあまり影響がないですよ。絹に課税してあまり効果がない。しかしですよ。週に2杯の紅茶を飲んでいて、そこに税が掛けられたら、これは大きなことでありましょう。多くのアメリカ人の日常的な食生活に悪影響を与えたということなのです。これだけ日常生活に大きな影響があれば、革命になるということなんですよね。そして、民主主義だ、人権だと言うけれども、お茶が大きな影響があったわけです。イギリス悪いよと、お茶に税を掛けてくるよということ。私たちはどうして全く代表権のない議会に課税をさ

れているのか、ひどいではないかということになるわけでありませう。一つの例を申し上げました。いかに日々の食生活が影響があるかということでありませう。他に税を課されても知らん顔であっても、やはり沢山飲むお茶に税がかかったら、彼らは怒るわけですよ。そして、革命を起こしたわけですよ。よろしいでしょうか。動機がここにあるわけでありませう。ですから、日常の生活の変化が政治の動きをつくるということですよ。

それから、他に日常生活の変化が政治の動きを作った例と言えれば香辛料もそうだと思います。これは西側の帝国主義にもつながったわけでありませう。なぜ帝国主義者が出ていったかということ、(原因は)香辛料でありませう。第1波でありませう。それは、冷蔵庫の前(の時代)でありませうので、ヨーロッパでは冬がありますけれども、香辛料がなければ、食品の香り付けには塩だけだったのであるけれども、本当にこれでは退屈になりますよね。16世紀に香辛料、コショウでありませうとかシナモンとかクローブのようなものを買えるのは本当に一握りのお金持ちでありませう。しかし、今、当たり前のことですよ？スーパーに行けば何でもありませう。安い香辛料をいくらも買えますけれども、16世紀はそうではなかった。香辛料とかコショウでありませうけれども、金より高かったと言われておりませう。今は本当に考えられないと思いますけれども。

ですから、この西側の帝国主義、ポルトガルとかスペインとかが、最初の波として来て、その後がオランダでしたね。そして、イギリス。ご関心があれば調べてみてください。香辛料を求めて、やはり西洋は来たわけですよ。

イギリスは中国茶、中毒になってしまいました。とにかく、アフタヌーンティーは飲まないといわれなくなりました。中国茶を銀で払ったわけでありませう。中国は、何でもあるからということですよ—中国人も本当に思い上がっていましたから—ヨーロッパからは何も要らない、私たちに何でもある。しかし、銀からは、銀を求めたわけでありませう。お茶の代金に充てたわけですよ。そうしますとイギリスは…分かりましたね。本当に銀がどんどん流出するということでありませう。彼らはちょっとアイデアが浮かびました。ではこれを相殺するために、中国に何かを輸出すれば良いではないか。それが何だったと思いますか？アヘンを売り始めたわけですよ。これは中毒性があります。麻薬ですよ、アヘン。それを中国に売り始めた、ひどい話ですよ。中国側は、駄目、これは毒があるではないかと、国民に売るなど、抵抗いたしました。そして、イギリスは、最初のアヘン戦争、2度目のアヘン戦争を行い、中国は負けました。簡単に言えば、これは大きなショックでありませう。中国のショック、そして、韓国、それからまた日本にもショックでした。どうして中国が負けるのか。イギリスの船艦ですよ。これが本当に簡単に中国を楽々と打ち破ったわけでありませう。中国の清王朝でありませうけれども、今まで弱さを見せていなかったのに。

それと同時に、もう本当にひつぎにくぎを打ち込んだようなものでありませうでしたが、中国の朝貢体制が崩壊したわけでありませう。東アジアの朝貢体制。中国は、「中華」でありませうから、他の周りの国、ベトナム、韓国、日本などの周辺国が貢ぎ物を持ってくるのが彼らの貿易でありませう。19世紀の半ばでありませうけれども、この朝貢体制は終焉に達していたわけですよ。屋台骨がぼろぼろになってきて、そして、日本の明治時代(末期)、1911年に清朝は崩壊をいたしました。

だから、このように積み重なっていつて、日常生活は政治に影響があるわけでありませう。そして、王朝ですよ。清王朝の始皇帝から2000年も続いたのに、帝国体制は1911年に崩壊をいたしました。今日の中国を見てみましょうか。国際的な関係というのは、東アジアで全然違うではありませんか。国際化が、数百年前と全然違います。その当時は、中国は非常に東南アジアで覇権を主張しておりませう、朝貢体制だったのです。全く違いますよね？

次は、東アジアの経済と地政学ですよ。これもドライバーになります。時間が足りないので一部割愛いたします。東アジアの将来はどうなるのか？グローバル化が終わるということではありません。中国の習近平氏とアメリカのバイデン氏は、数日前にサンフランシスコで首脳会談をしていましたけれども、その時には色々話し合いがあったと思います。トランプの任期の時から、貿易、人材、それから、金融

サービスを切り離す、デカップリングすると言っていましたね。このデカップリングは、するからと言って一挙に脱グローバルになるということではないのです。グローバルの側面というは残ります。例えば技術の進展とか、あるいはネットワークなどは、不可逆なものであります。

それからまた、生産のネットワークの再編成があると思います。アジアのネットワークは台頭しております。あるいは、多様化が広がっております。中国から離れ、ベトナムに行く、あるいは、タイに行くとかいう動きがあると思います。

ただ、地域化ということを考えましたら、北東部では非常に強い地域化が進むと思います。制度的には、北東部では地域の組織がありません。東南アジアでは、私の出身地でありますけど、ASEANがありますよね。しかし、北東アジアにはASEANのようなものがないのです。中国、日本、韓国で構成されますTCSというのがあって、文化的な、あるいは経済的なテーマで活動しておりますけども、非常に規模の小さいものであります。私はソウルの中日韓協力事務所があるTCSタワーに行ったことがあります。例えば日本と韓国と中国のスポーツ振興などをやっております。でも政治的な問題は避けなければいけない状態でありました。

ではどうして北東アジアが団結できないのか、なぜASEANのような組織ができないのかと思いますよね。それは領土問題があるとか、歴史の問題とか、あるいは異なる同盟関係の結び付き—韓国と日本はアメリカの同盟、中国はもちろんそうではありません、また体制が違う、価値観も違うということで、北東アジアの連合体ができないのです。中国は今、技術的なサイバーの全体主義をとっております。韓国、日本は、民主主義でありますけれども、しかし不完全な民主主義であります。経済、地政学、そしてデカップリングとか再編成を考慮したら、北東アジアが近々に同盟を組むことはないと思います。

少し前にASEANの話をしたしましたがけれども、学生の皆さん、アジア研究センターでも東南アジアの研究を忘れてはいけません。日本の人口というのは、縮小しています。推定ではありますけれども、2060年までには1億2,500万から8,700万に減るといわれております。ではASEANはどうなのでしょう。人口は、2060年には、何と、7億9,800万人に達すると想定されております。ということは、日本の人口の9倍から10倍になるということです。そして、ASEANの国というのは、2060年までには中間階級が増えます。中間階級が増えまして、日本よりずっと若い。2060年までには、日本の人口の40%が65歳を超えるといわれております。ところが、ASEANの人口ですけれども、2060年までには、比較的若いんです。日本より若い。ということは、東南アジアとASEANというのは非常に重要な市場になるということです。その時までには、日本にとりましても、中国にとりましても、また、韓国にとりましても、ASEANの重要な市場性というのが台頭するわけでありまして。

日本で、工場とか漁業とか、あるいは高齢者施設でASEANの人たちが働いていらっしゃると思います。ホテルの労働力にもなっていると思いますし、ラーメンの店でも、あるいは、セブン-イレブンでも、東南アジアの人たちが働いています。ASEANの消費力というのが上がりましたら、日本は変わっていきます。ASEANでは、各国の個人の若い中間階級の人たちの決定が積み重なります。これは駆動力があるわけです。ASEANで経済を駆動していきます。また、消費パターンです。1960年代、70年の日本のような感じです。変化の機動力というのは中国ではありません。どんどんASEANに行くのです。それが皆さま方も分かるでしょう。ですから、学生の皆さま方、アジアの研究をしていて、良い決定をされましたよ。ASEANこそ未来ですからね。研究をしてください。

向こう20年、30年、将来はどうなるのでしょうか？ アメリカが下がったとか、中国が上がったとか、それだけではない。中国が台頭して、アメリカが衰退したりという地政学の説明は単純過ぎます。申し上げた通り、ASEANが台頭するからです。第2次世界大戦直後には日本が台頭したわけでありましてよ。それから中国が上がってきて、そしてASEANが台頭するという波です。国際関係は二極化ではなくて、中国対アメリカではありません。ASEANが台頭いたします。韓国、それから、ある程度までは日本もそうだと思いますけれども。ですから、アメリカと緊密な関係は続くでしょうけれども、それと同時に、関係は多様化いたします。だから、国際関係というのは、東アジアでは多極化するのです。

多極化であって二極化ではないのです。多国間関係というのは、ASEAN を中心に回ります。多国間国際協調というのは、アジアサミットやASEAN の防衛など、そういったもので進んでまいります。

また先ほどのポイントを繰り返しますけれども、皆さんがどのように決定を下すか、どのようにお金を使うか、どのようにリサイクルするか、どのような生活様式を取るのか、消費者としてどのような選択をするか、こういった我々の日常生活と草の根のレベルのものが積み重なって、地域的、そして、グローバルレベルの問題に発展していきます。

次に人口と環境についてお話しします。北東アジアは、急速な高齢化と人口減少に直面します。高齢化社会と人口統計学上の平和とは何でしょうか？ 政府が福祉にお金を使わなければなりません、どのようにそれを工面していくか、どのように軍事費を使うか、どのように若い人にお金を使うか。税金を上げるといってもできますけれども、そうすると選挙に受からなくなりますね。ですので、どのように銃にお金を使うか、どのようにバターにお金を払うか、銃対バターの予算政策の問題に直面していきます。

社会では高齢化が進んでいます。一方で各国は、軍隊に人をリクルートすることに大変苦勞しております。高齢化社会だからです。中国でもそうです。中国でも、若い男女に国軍に加わらせることに苦勞しています。次の10年、20年、30年と見た時に、このアジアの国々は、そして、東南アジア全体が、若い人たちを軍隊に動員するのに苦勞すると思います。この過程では、軍事費が増えて財源が減少していきますので、若い人たちを動員しなければなりません、それに苦勞するわけです。

私の楽観的な考えかもしれませんが、中国、日本、韓国、台湾は相互に批判していますが、でも、皆みんな戦争は行きたくありませんよね。まずお金がかかる。そして、どんな結果が生じるか分からない。若い人たちがたくさんの命を落とすわけです。現実問題として、日本は女性議員の数が少ないですよね。誰かを責めているわけではありませんけれども、楽観的なシナリオとしては、そのうち日本の女性首相が生まれる日が来ると思います。ヨーロッパではもう既に女性の首相がいます。韓国でもそうです。そして、台湾でも女性の首相がいます。私の観察では、イギリスのマーガレット・サッチャーではない限り、殆どの女性首相というのは保守的であり、福祉に注力するということです。戦争ではなく、福祉に注力するのです。これから10年後、20年後、30年後、日本と中国では、女性の首相が生まれるのではないかと考えています。そして、そういった首相たちは、日常の生活にもっと注力した人たちになるのではないかと考えています。子育て、それから、福祉。確かではありませんが、そうなると思っております。

100年前に、飢餓や戦争、病気で人口減少するまで、人間の人口は食料供給よりも急速に増加するというのを、トマス・ロバート・マルサスが唱えました。世界の人口、2023年は81億人になると言われています。70~80年後、2100年までには104億人になると予測されています。それでは、エコロジカルな制度にどのようなインパクトが出るのでしょうか？ もちろん、地球温暖化、それ以外に。もしこのように人口爆発が起きるとしたら、100億人の人々が食料を求めて戦うわけです。そして、エコロジカルな混乱が起きます。国内そして国家間で、水や鉱物を求めて争うことになります。

では、AIや、バイオテクノロジー、それから、遺伝子編集などのテクノロジー、こういったものはパンドラの箱を開けることになるのでしょうか？ シンガポールの学生では、チャットボットとかGPT、そういったものを使っております。皆さん、チャットボットはロガリズムシステムに基づいていることをご存じですよね。チャットボットにデータを提供していますね。チャットボットが何をやるかという、膨大な量のデータベースを元に、対数演算によって最も可能性の高い答えを導き出すようにするのです。我々の日常生活は、こういったチャットボット、あるいはAIに皆さまの情報をどんどん提供しているわけです。

私の質問はこれです。Google Xの元代表、モー・ガウダットは、AIの臨界点というものが、2年以内に到達するとしています。それでは、臨界点とは何でしょうか？ 臨界点というのは、AIが自立して人間よりも優れた思考と行動ができるようになるということです。そして、自立するということ。人間の助けなしに、そういったことができるようになるということです。ということは、チャットボット

にも、どうするべきかということ教える必要がなくなるということです。ある時、AIが人間のプログラムを逃れて、人間のコントロールから逃れる時が来るでしょうか？北朝鮮が核戦争を起こすボタンを押すかもしれない。もしAIが凌駕してしまうと、こういった恐ろしい決定がなされる可能性もあるわけです。

今、分岐点にあります。我々がどのように日常生活を送るべきか。地球温暖化は大きな問題です。集団としてどのように生活をするのか、グローバルのエコロジーにどのような影響を与えるのか。80億、100億人の人がどのように影響を与えるのか。

多くの事柄について、我々は恵まれています。神奈川大学のこういったホールにいることも大変恵まれています。皆さんスタイリッシュで。ラテンアメリカの国々では、皆さんのようにおしゃれな格好はしていません。我々の日常では、生活を送ることが大事なのですが、学生として、理想を持ってください。

次のAIの進化は何だと思えますか？例えば、人間のミュータントのようなものができると思えますか？あるいは、AIと人間のサイボーグのようなものができると思えますか？G7はAIについて考える時が来るのかどうかということです。

私のまとめとして、われわれの生活はAIにますます頼るようになってきています。そして、こういった状況で国際関係はどのようになされるべきなのか、そういったことを考えていくべきだと思います。ありがとうございました。

第二部 ショートスピーチ・意見交換

石井：これより、第2部、「『日常』から『アジア』を考える」を開始させていただきます。第2部では、まず、各分野のご専門の先生方からショートスピーチをしていただいてから、意見交換へと移ってまいります。

ショートスピーチ

青木（岡部） まき

日本貿易振興機構アジア経済研究所動向分析研究グループ長代理（政治分野）

こんにちは、青木と申します。ジェトロアジア経済研究所というところで、タイの政治外交を専門に研究しております。今日は「アジアの日常」というテーマを踏まえまして、タイにおける新型コロナウイルス感染症の拡大の影響について、お話ししたいと思います。

コロナはタイでも日本と同様に、人々の生活を大きく揺るがしました。命や生活への不安は、コロナ対策の責任を負っていた政府への批判、あるいは不満となって拡大しました。殊に

大きかったのは、それまで積極的に、あるいは消極的に政府を支援して支持していた都市の中間層といわれる人たちが、政権を批判する側に回ったことです。その影響もあって、タイでは、今年2023年に入って、大きな政治的变化をうかがわせる出来事が起きました。

タイで新型コロナウイルスの第1波が確認されたのは、2020年初めです。ただ、この時は市中感染はそれほど小さくなく、地域の保健所や保健ボランティア、それから、保健省などの活躍で、5月には市中感染ゼロを記録し、タイはコロナ対策の優等生などといわれていました。この写真は、バンコクの



ある企業が2020年に作ったコロナ流行下での予防啓発動画の一部ですけれども、マスクはしていませんし、緊迫感がなくて、まだ日常の延長にある雰囲気を感じさせます。

それが、2021年に入ると、タイ国内でコロナの第2波、そして、第3波が始まるんですね。この図は一日当たりの感染者数の推移を表したものです。タイで本当にパンデミックといわれる状況に陥ったのはこの時期でした。2020年の年末ごろから感染が拡大し始めて、3月末から第2波が始まり、6月には第3波に拡大します。この時、非常事態宣言が出て、バンコクなど、特に感染が多い都県では、11月まで都市封鎖が行われました。市民の生活は大きく制限されて、失業、あるいは、自分の仕事、工場が閉まってしまって出勤できない、生活の苦境を訴える人々が増え始めました。

これは、2021年のバンコク市内の様子をうかがわせる写真です。PCR検査の会場が足りず、外で受けている様子が下の写真です。また、上の写真は、病院の病床が、ベッドが足りなくなって、公営の体育館など、公共の施設に簡易ベッドを設けて、感染者の受け入れ、隔離をしているのですけれども、見るからに簡素なベッドで、プライバシーもなく、なかなか厳しい状況であることが分かります。また、極めて少数ですが、貧しい人やホームレスの人の中には、感染して、道端で倒れて、そのまま亡くなってしまおうというケースがあって、そうした様子が不安や恐怖を感じさせる調子で盛んに報道されていました。

こうした拡大、第3波の中で起きたのが、コロナデモと呼ばれた抗議活動です。コロナデモは、明確な主張や組織、リーダーがないまま、偶発的に、バンコク市内で、政府批判を繰り返す形で続きました。その中心になったのは10代から20代の若者で、彼らは、非正規などの不安定な雇用形態で働いていた低所得層の人たちでした。コロナ禍で仕事を失ったり、自分や家族が感染して経済的、社会的な苦境に陥った人が多かったといわれます。こうしたコロナデモに対して、警官は、放水など、強制排除を行って、それに反発した若者が逮捕されるといったことが続きました。

もう一つ注意したいのは、こうした若者たちのデモとは別に、30代から40代の中間層といわれる人たちが政府のコロナ対策を批判する集会に参加する姿が増え始めたのです。これらの集会では暴力的な様子は見られなかったのですが、それまで、割と年も上で、穏健な保守派だと思われていた人たちが、多くこうした集会に参加するようになったというのが注目すべき点であったと考えます。

そして政府のコロナ対策への不満は、世論調査からもうかがうことができます。この図は、タイで2020年から22年かけて、世論調査機関が行ったアンケート調査の結果を示したものです。注目していただきたいのは、このオレンジの線。これは、主要な政党の指導者の名前を挙げて、誰が首相にふさわしいと思いますかというアンケートを定期的にとったのですけれども、このオレンジの線は、当時の現職の首相、プラユット首相の支持を示すものです。この支持率が21年の3月の第2波が始まったころからどんどん下がっているのが分かるかと思えます。プラユット首相、それまで、比較的支持率が高い状態を維持していました。それが、彼の人気の凋落がコロナのパンデミックといわれる状態と、ほぼ同時期に起こっているということを確認していただければと思います。

さらに、人々の不満は、政府のワクチン対策に集中しました。2021年8月の第3波のさなかに行われた世論調査では、回答者の7割以上が、ワクチン対策のミスが感染拡大の最大の原因だという回答をしています。そのうち特に問題視されたのが、タイ国内におけるワクチンの不足、それから、ワクチン接種が、調達できたけど遅々として進まない、自分のところまで来ないという2つの問題でした。2021年6月末時点、パンデミックの第3波が始まった時点で、タイ国内でワクチンを接種した回数は、累計で993万回。接種回数が累計で5,000万回を超えたのが9月の下旬、パンデミックが終わりかけたころです。タイの人口はおよそ6,700万人であることを考えると、ワクチン接種がスムーズに進んだとはとても言えない状態であったことが分かります。

さらに、ワクチンをどこから手に入れるか。調達する方法が、王室が所有する製薬会社、それから、大財閥がタイにはあるのですけれども、こちらが出資した企業などによって独占されている状態だったことも大きな問題となりました。ご存じのとおり、タイはこれまで王室に対して、国民がすごく強い敬愛の念を持って接している国だといわれています。この時、タイの国民は、王室の企業がワクチン生産

のライセンスを独占したことについて不満を隠さなかったのです。

さらに、調達したワクチンの品質も問題になりました。これは、当時流行していた変異株に対して効果が薄いといわれていたワクチンしか調達できていない。それが一番安かったし、数が多かったというのが理由なのですけれども、これに対してやはり不満が集まる。まず、ワクチンが足りない、しかも効果が薄いものがほとんどで、自分が何を打つか選べない。この状態が自分の身に起こったと思ってみてください。頭にきませんか。やっぱりタイの人も嫌だったわけです。

私、バンコクにタイ人の友人がいるのですけれども、ここに彼女の怒っていた言葉を引用したのですが、「政府は私たちの税金で、ワクチンを調達している、それなのに、なぜ私たちは自分たちが打つワクチン選べないの？」ものすごく怒っていました。これはタイ国民の、政府、あるいはワクチン対策に対する怒りを象徴する言葉であったと、今、思います。

政府は自分たちの税金を使っているのに、自分たちの希望する対策をとっていないという、この怒りは、それまで国王を尊敬して、良き市民として自分たちはタイ政治を支えているという自覚があった都市の中間層といわれる人たちの間で特に強かったように思います。タイでは、2000年代から国の在り方を巡って政治対立が起きて、それが今でも続いている状態ですけれども、その対立は、こちらの図のような構造の下で続いてきたというふうと考えられます。

右側のグループは、タイの支配層である国王や王族、その手足となる国軍や官僚、政府や王党派と結び付いた財閥、そして、国王を支持して、国王の下で自分たちは民主主義を実現してきたのだという自負心がある都市部の中間層などのグループです。それに対して、左側は、旧来の体制を批判する新興の中間層であるとか、政治経済上、長い間不利な立場に立たされてきた地方の住民、それから低所得層といった人々が異なる政治体制を理想としていて、どちらを取るべきかということ巡って長年対立を続けてきました。

しかし、パンデミックはこの構造を変えたのではないかというふうを考えています。より具体的には、図の右側のグループの人たちの中の都市部、旧来の中間層という、この四角の中で、自分たちの立場を巡る新たな気付きがあったのではないか。それはどのような気付きかという、自分たちは教育があって、都市に住んで、低所得層や地方に住んでいるような人とは違うと思っていたけれど、実はエリート層ではないという点においては、こちらの左側の人たちと大して変わりはなかったという気付きです。

コロナのパンデミックは、低所得の若者たちも、職があって中間層として働く壮年の人、それから高齢者も、等しく襲いました。自分たちはワクチンが手に入らず、感染したら下手したら体育館でベッドで寝なくてはいけない、そういった状況が、政府は自分たちを特別視してくれない、そうした気付きにつながって、この当時起こっていたさまざまな他の要因と一緒に合わせて、単なる政権批判を超えて新たな政治の動きにつながったのではないか、そういった変化の影響について、指摘しておきたいと思います。

その変化、どんな変化だったのかを示したのがこの図です。今年の5月、タイでは、国会下院の総選挙が行われました。この選挙では、プラユット首相、現役的首相が率いる与党勢力は大幅に議席を減らして、政権交代を訴える野党勢力が大躍進を果たしました。一番左の図は、前回、2019年の選挙結果であり、右側2つが2023年と今年の選挙結果です。青系の色が与党勢力が勝った選挙区、そして、赤やオレンジなど赤系のところが野党勢力が勝った選挙区を示しています。青から赤へ、鮮やかな変化がこの図から見て取れると思います。タイ国民は、コロナで、自分たちの日常、生命を守るために十分働かなかつた政府に対して判断を下して、その政府に明らかにノーを突き付けて、政権交代すべきであるという態度をこの投票によって示したということが出来ます。若年層や低所得層、それから、地方の住民だけでは、この変化は起こせません。都市部の住民、中間層、壮年や高齢層も、変化を求めて投票したのが今年の選挙のこうした結果であったというふうと考えられます。

未知のウイルスによる感染爆発、コロナの流行は、日本と同様に、タイの人々の生活の基盤を大きく揺るがして、日常に対する安心感を損なった、見方を変えたと言うことが出来ます。生活や生命の不安

は、コロナ対策の責任を負う政府への不満となって、政権批判につながりました。その経験は、それまで政府を積極的、あるいは、消極的に支持してきた、特に都市の中間層の人たちに対する大きなインパクトとなって、自分たちも向こう側の人だったと気付くきっかけになったと考えます。これらの人たちが、政権や、ひいては、まだそこまで言えるかこれから見ないとはいけませんけれども、政治体制自体も見直す大きなきっかけになっていったのではないかと考えています。

タイを含む東南アジア諸国では、1950年代から70年代にかけて、いわゆる開発権威主義体制といわれる政治体制が多数現れました。タイもその一つでした。そこでは、指導者が、経済的發展、あるいは国の安全、そういった課題を優先して、そのために国民の生活や権利を制限する、そういった措置が取られました。国民の一部はもちろんそれに抵抗したのですけれども、多数派はそのロジックを受け入れざるを得なかった、あるいは、積極的に受け入れて、所得向上や社会福祉の充実といった利益を得て、その政治体制を消極的なり積極的なりに支持していったわけです。

しかし、やがて経済發展の結果として、教育を受けて政治に対する意識というものを变化させた中間層といわれる人たちが、政治権利をもっと拡充したい、自分たちはこんな制度の下で暮らしたくないという主張をして、民主化を進めて、開発体制というのはやがて、70年代から90年代にかけてなくなっていったわけです。過去のものになったといわれる開発体制ですが、国家が経済發展や社会福祉に大きな責任を持つ、あるいは、持つべきだという考え方、自分たちの生活の基盤、日常を守るのは政府の仕事だという考え方は、実は、私が思っていた以上に現代にもまだ残っている。開発であるとか日常の安定であるとか、そういったことが、大きな政治課題としてまだ期待されている。そのことが大きく出てきたのが今回のタイにおけるコロナのパンデミックの出来事だったのではないかと、一つ提案をしてみたいと思います。そうした考えは、政府とは国民のエージェントで、忠実なエージェントであるべきだという選挙民主主義の考え方と合流して、国民の日常を守れない政府は国民によって排除されるべきだという意思表示を、今回の選挙によって行ったのではないかと。

今回の新型コロナウイルスのパンデミックを巡るタイの政治を見てみると、私は、民主主義を進める、あるいは、国民主権という概念を求めるといった主張と並行して、こういった考え方もまだあるような気がしてなりません。以上、私からの発表を終えたいと思います。

魚住 和宏

神奈川大学アジア研究センター客員研究員／経済学部非常勤講師／SCMソリューションデザイン代表（経済分野）

皆さん、こんにちは。魚住と申します。私、本業はサプライチェーンマネジメント、SCMのコンサルタントです。ですから、日頃は企業へのSCMのサポートに加えまして、神奈川大学経済学部で非常勤講師を務めさせていただいております。グローバルロジスティクスと、それから、貿易関連の講座を2つほど担当しております。よろしく願いいたします。

今日は『脱中国』の受け皿として注目されるベトナムの成長性を探る」というテーマでお話をさせていただきます。

米中デカップリングの影響で、脱中国の動き、中国企業もそうですし、中国に拠点を持っていた企業もそうですし、中国から生産拠点を移そうという動きが起きております。一つの受け皿がメキシコです。もう一つの受け皿がベトナムです。アメリカへの輸出拠点をこのような形で動かそうとしております。私は専門がASEANの経済とロジスティクスですので、ベトナムに注目をして、お話をさせていただきます。



この写真ですね。ちょっと分かりにくいかもしれませんが、まさに今、アジアの日常となっております配車アプリ、Grabの写真でございます。真ん中のラックフェン港というのが、皆さんあまりご存じないかもしれません。これは、北部ベトナムに2018年にできました、いわゆる深海港、岸壁水深が16メートルと、深い大型コンテナ船が受け入れ可能な新港でございます。私は、これがベトナムの成長をこれから占うというふうに考えておりますので、ここで少し時間を取らせていただきます。

まず、ベトナムの関連のデータ、これASEANの他の国と比べて見ていきたいと思っております。まず、実質GDP成長率、これは前年比を並べているのですけれども、2011年からのトレンドで、これがベトナムです。大体、年率8%ぐらいの高い伸び率を示しているというのがお分かりいただけると思っております。コロナ禍にありました2020年も、唯一、プラス成長ですね。下に実数がありますけれども、2.87%という成長率を示しております。

次に、ASEAN主要国の購買力平価GDPの2000年からの推移ですけれども、皆さん、名目GDPの数字は非常によくご覧になったことがあると思っております。ただ、皆さん、名目GDPは、為替の影響を色濃く受けます。なぜならば、GDPは自国通貨でまず計算されますけれども、それをUSドルに換える時に、名目GDPは為替レートを使います。ですので、私は、購買力平価GDP、これも各国国際機関から発表されているものなんですけれども、こちらの方もフォローしています。皆さん驚かれると思えます。これ、ASEANの場合、大体3倍ぐらいになるんですね。見ていただきたいんですけれども、これインドネシアです。約4兆ドルという規模になります。ベトナムは1.32兆ドルという規模でございます。これは名目GDPですと、ベトナムは約4,000億ドルという数字です。

1人当たりになると、皆さん、よりびんとくるのではないかと思うのですけれども、これが1人当たり購買力平価GDPの推移です。シンガポールとブルネイはかなり突出していますので、シンガポールとブルネイはこの棒グラフで表しております、スケールは右の軸です。それ以外の国は、この折れ線グラフでスケールは左ということなのですけれども、シンガポールの1人当たり購買力平価GDPは12万7,564ドル、びっくりしませんか？日本は約6万ドルです。ベトナムですけれども、2022年、1万3,284ドルということです。これも、1人当たり名目GDPで言いますと、4,000ドルなんですね。4,000ドルというと、まだまだ後進国、あるいは新興国というイメージかと思っておりますけれども、1万ドルを大きく超えてくると、これはもう中所得国です。ちなみに、ASEAN主要7カ国は全て1万ドル超えです。

次に貿易総額、やはりベトナムは、私の目から見ると貿易国ですね。このグラフは、貿易総額がどのような動きをしているのかということ、2000年からのトレンドで示しております。2000年当時は、ご覧のようにボトムです。ですけれども、右肩上がり成長を続けておまして、今は7,306億ドルということで、シンガポールに次いで、ASEANで第2番目につけております。2000年と比べると、何と24倍に成長していると。

次は、対内直接投資残高の推移です。これも2000年からの推移を追っております。ASEANの中ではシンガポールが抜群に多くて、ちょっとグラフがいびつになりますのでシンガポールは除いております。インドネシア、タイには後塵を拝しておりますけれども、ベトナムは2022年には2,105億ドルという数字になっております。着実に増加を続けている。

私はロジスティクス屋ですので、コンテナ取扱数というのを追い掛けております。国別、あるいは港湾別です。これは国別の数字です。2000年から2021年のトレンドですけれども、ベトナムは2021年で1,836万TEU、このTEUっていうのは、Twenty-foot Equivalent Unitsの省略でして、20フィートコンテナ換算のコンテナ数と、コンテナを数える際の単位です。1,836万TEUということで、シンガポール、マレーシアに次いで、ASEANの中で3番目ということです。ただ、皆さんに注目していただきたいのは、やはりこのトレンドですよ。かなりシャープな右肩上がりになっていると思えます。

これが輸出入のデータでして、冒頭で、米中デカップリングの影響で、脱中国が、一つの向け先としてベトナムというふうに申し上げました。これ、輸出入のデータでございまして、まず、左側の輸出を見ていただきたいのですけれども、ベトナムの最大の輸出相手国はアメリカです。ご覧のように、982億ドルで、構成比29%ですから、ベトナムの輸出の約3分の1はアメリカ向けであるということ

す。あと、もう一つ注目していただきたいのは、この伸び率です。前年比 24.9% です。このジェトロさんのデータは 2021 年までしかまだ公開されてないのですけれども、ベトナムの輸出データを拝見しますと、2022 年も、約 10% 以上の伸びを示しております。

この中身は、アメリカ向けは、かつては縫製品がナンバーワンだったのですけれども、今では機械設備、部品が最も多いということです。スマホかなとかかと思っていたのですけれども、機械設備、部品がナンバーワンとなっております、1 年で 40.9% 増ですね。

輸入を見ていただきますと、輸入相手国の一番は中国です。輸出のアメリカと同じように、約 3 分の 1 を占めているということです。伸び率、31.3%。これもベトナムの輸入統計を見てみますと、2022 年も約 40% ぐらいの伸びを示しています。

皆さんこれを見てどう読み取りますか。ベトナムは、中国から部品、部材を調達し、そこで完成品にして、アメリカに輸出をするというサプライチェーンが、この 1~2 年でかなり進んでいるのがお分かりいただけると思います。まさに、ベトナムが脱中国の受け皿になっているというデータです。中国からの輸入の主要な品目は、機械設備、部品、それから、コンピューター、電子製品、部品ということです。

次、ラックフェン新港のお話をいたします。なぜラックフェン新港なのかということ、このスライドを先に皆さん方にご説明をいたします。ラックフェン新港、先ほど申し上げましたように、いわゆる深海港です。深い港です。この深海港は、ベトナムでは南部にカイメップ・チーバイ港というのがありますが、北にはなかったのです。2016 年から本格的な工事が始まって、2018 年から開業したのですけれども、この深海港ができることによって、大型コンテナ船が入れる。この意味は、日本とか欧米に向けて、直接ラックフェン新港から出せるということです。

それまでは、北はハイフォン港という港があるのですけれども、これはいわゆる河川港でして、深さが 7 メートル程度しかないのですね。そうしますと、船のサイズでいうと、1,000TEU とか、1,400TEU クラスの船しか入れません。ですから、必ず、香港、シンガポールなどで積み替える、これ Transshipment と言いますが、積み替えて、欧米、日本に行くということで、リードタイムが長くなってしまいうですね。これはあんまり荷主にとってはありがたいことではありません。ですから、ラックフェン新港に対する期待は、ベトナム政府はもとより、在ベトナム企業にとっても非常にこれはありがたい存在であるということが言えます。

場所はどんなところにあるのかといいますと、ハイフォン港のすぐ隣です。ハイフォン港の東、約 15 キロのところを位置しております。ではこのハイフォンとハノイの位置関係はどうかと言いますと、高速道路で約 120 キロ、これ 1.5 時間と書いていますけれども、私が 7 月に視察に行った時は 1 時間 20 分ぐらいで行きました。

バクニン省という地域に工業地帯があります。ここに、サムスン電子、キヤノン、あるいはフォックスコンなどの大きな工場があるんですね。ここから海上輸送で輸出する際には、今まではハイフォン港をメインに使っていたと。ハイフォン港まではトラック、あるいは河川を使って、バージ輸送していたのが、これからはラックフェン新港が主力になるであろうというふうに思われます。

港湾の場合、必ず運営会社というのがあるのですけれども、ラックフェン新港のは Haiphong International Container Terminal Company、HICT という会社が運営会社になっておりまして、この資本構成が非常に興味深いというか、われわれロジ屋にとっては興味深いのですけれども、Saigon Newport というベトナムの国営の港湾運営会社が 51%、それ以外は、商船三井、伊藤忠商事といった日系企業、それから、台湾の Wan Hai Lines というところが出資をしております。現在、バースが 2 つ、ガントリークレーンが 6 基で運営をしておりますが、計画上は、これから 8 バースに拡張するというふうに聞いております。最大岸壁水深は 16 メートル。16 メートルですと、大体 1 万 TEU から 1 万 4,000TEU ぐらいの大型コンテナ船が着けられます。

このグラフはベトナムの地域別のコンテナ取扱量ですけれども、ホーチミン港、それから、カイメップ・チーバイ港、この南部の 2 港で、約 1,200 万 TEU ですね。この 6 割、65% が、南部の 2 港という

ことです。ベトナムは北部に重工業が集積していて、南部に、こういう縫製業ですとか、食品工業ですとか、軽工業が中心なのですけれども、南部の方がかなりコンテナ取扱量が多いというのは、ちょっと興味深いところでもあります。

中身を見ますと、カイメップ・チーバイ港が、これです。非常に伸びが大きい。ハイフォン港の621万TEUの中に、ラックフェン新港の約100万TEUというのが、これ含まれております。

ラックフェン新港、2018年に開業して、私は開業当時も視察したのですけれども、ここから約6年たつて、四半期ごとにこういったトレンドを示しております。ご覧のように、2021年にボンと上がっているのがご覧いただけると思います。ここで、この水深16メートルまでの浚渫（しゅんせつ）工事、この港を掘る工事ですね、が完了して急増したと。そして2022年に100万TEUを超えたということですね。

この中身を見ますと、アメリカ向けの輸出、これ実入りというのは業界用語ですけど、貨物が入っているコンテナ、空ってというのは空コンテナです。このアメリカ向けの実入りのコンテナが約3割ということですね。やはりアメリカ向けがナンバーワンということですよ。

ラックフェン新港の拡張計画は、先ほど申し上げましたように8バースまで拡張計画があり、もう既に港湾運営会社も決まっております。この写真に、ビンファストというのが見えると思うのですが、これはベトナム資本の自動車メーカーです。巨大な工場がここに建設されております。今、このラックフェン港とハイフォン港のエリアに工業団地がどんどん造成されていて、企業の工場ですとか、あるいは倉庫がどんどん建てられております。これから、このラックフェン、それからハイフォンエリアに、産業が集積してくるものと思われまます。これが写真ですね。ビンファスト、まだ自動車はそんなに作れてはいないようです。電動スクーターとかの生産も行って、日銭を稼いでいるようです。

まとめますと、ラックフェン港、晴れて16メートルの浚渫工事が終わって、ほぼ全てのメジャー船社のサービスを誘致しております。ですので、ほぼほぼ順調ということが言えると思います。先ほど地図で見ていただいたとおり、工業地帯のバクニン省からのアクセスが非常に良い、それから、ハイフォン港あたりでも工業団地はこれからどんどんできますので、産業が集積してくるといって、これはやはり、ラックフェン港の役割は非常に大きいものと思われまます。

ただちょっと気になりますのが、先ほどLam先生も言及しておりましたけれども、米中のデカップリング、これがどういうふうに動いていくのか。今、フレンド・ショアリングとか、ニアショアリング、いって、友好国同士でサプライチェーンを組む、あるいは、近隣国同士でサプライチェーンを組むという動きがかなり進行しております。半導体とか電気自動車などの産業では、地産地消型のサプライチェーンに動いておりますので、ベトナムからの遠距離航路の需要が順調に伸びていくのか、また、ベトナムからアメリカ向けの輸出というのが今後も伸びていくのか。私はベトナムから出て行っているのは、自動車関係は非常に少ない、やっぱりスマートフォンですとか電子機器が多いので、この部分は伸びていくのではないかというふうに思っております。

次にベトナム小売市場のトピックスということで、これも日常をちょっと測るデータとして見ていただきたいのですけれども、このグラフは小売り全体のマーケットです。2019年から2022年までの実績、それから、2027年の予想ですね。これはイギリスの調査会社のユーロモニターのデータです。ご覧のように、ベトナムは、GDPの数字と同じように、2020年も、他はへこんでいるのですけれども、伸びていて、でも、2021年には若干ちょっと反動があります。注目していただきたいのは、この2022年から27年までの伸びの予想が66%ということで、ASEANの国々の中での最大の伸びをユーロモニターは期待して予想しております。

あともう一つ、これも日常という観点で見ますと、パンデミックを通じて、ASEANの中でもeコマースが非常に伸びております。一番極端なのがインドネシアで、2019年、コロナ前はeコマース比率はわずか10%程度だったものが、2022年には30%に達しております。ベトナムは、2022年は12%ですけれども、2027年には19%、今の日本よりも若干高い。先ほどのインドネシアの30%っていうのは、中国、アメリカ並みです。

この写真のウィンマート・プラス、私は非常に注目して見ております。2014年に、先ほどの自動車の会社のピングループですね。本業は不動産なのですけれども、そこが2015年に進出したセブンを迎撃するように、急速に店舗を展開しました。ピーク時には3,000店舗まで膨らんでいる。しかしながら、業績が傾いて、食品メーカーのマサンに売却しております。これがどういうふうになっているのかなというふうに見に行ったのですけれども、全然変わっていませんでした。ご覧のように、生鮮品ですとか要冷蔵品を多数扱っているというのがウィンマート・プラスの特徴です。

現地の人にインタビューさせてもらったのですが、値段はやっぱりちょっと高めなんですけど、店舗数がやはり多いので、非常に便利であるということですね。都市部では勤め人がかなり増えていますので、今後、こういったお店はまだ増えていくのだろうと思います。

一方で、迎撃されたセブンイレブンですけれども、全く駄目です。2027年までに1,000店を目指すというふうに公表していたのですけれども、わずか30店舗ぐらいで足踏みということで、昨年撤退を表明しております。今はフランチャイズ方式で、地元の資本の会社に売却しております。これ、私が撮ったお店の写真なのですが、だだっ広いイートインスペースとか、だだっ広いレジ前のスペースとか、非常にスペースに無駄がある。品揃えも、どう見てもベトナムの地元の人には受けないだろうという品揃えをしております。

ベトナムが小売市場で非常に特徴的なのが、このグラフで、トラディショナルトレードとモダントレードという数字を並べております。モダントレードというのは、コンビニエンスストアですとかスーパーマーケットです。モダントレードの比率がわずか13%、トラディショナルトレードがまだ残り80%ということで、他のタイですとか、シンガポールはもちろんですけど、フィリピンとかと比べますと、極端に低いんですね。

これはまだまだ伸びる余地がある。ですから、小売業も、スーパー、コンビニも有望な産業ではあるのですが、やっぱり非常に競争が激しいということが言えるかと思います。セブンイレブンのような、いわば日本流を持ち込むとまず失敗するというふうに思います。ということで、私の説明は以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

西井 涼子

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授〈社会分野〉

西井と申します。私の話は人類学ということで、今までのご発表の先生方とは違うデータになるかと思います。まず、人類学というのがどういう学問かということを簡単に説明させていただきます。人類学とは、フィールドワークという、自らが育った環境とは異なる場所に行き、そこで生活して感じることから出発します。いわゆる、よく異文化理解といいますが、やはり肝心なのは、人々が暮らしている日常生活を共にして、人間ということを考えることです。フィールドワークというのは、必ず、非常にローカルな人々の生活の中に入るということがありますので、そういうローカルな固有性と、そこからある意味、「人間とは何か」といった非常に大きな問いを立てるのが特徴です。そういう意味では、普遍性と固有性というのを明らかにしようとするという学問になります。人々がどんな世界に生きているのか、何を重要なものとして行為しているのかということについての理解を目指すということです。



私の調査地はタイの東南アジアなのですが、まず今日のタイトルを「ムスリムと仏教徒の共生地域における日常」としたように、私の調査地では、イスラム教徒と仏教徒が共に住んでいる、同じ村の

中にイスラム教徒と仏教徒がほぼ半々で住んでいて、そこで日常生活を送っています。30年ぐらい前に初めて調査に行って、その後行ったり来たりしているのですが、宗教が異なる人々がどのような関係を持っているのか、日常生活の中で、一体イスラム教徒と仏教徒というのはどういうふうに住んでいるのだろうかというのが、初めの興味でした。

まず簡単に調査地の概況と書いたのですが、東南アジアの場合によく言われるのが、大陸部のタイとかミャンマー、ラオスといった仏教圏、上座仏教というのが多い地域と、イスラム圏といわれるインドネシアとかマレーシア、ブルネイなどのイスラム教徒が多い地域のちょうど中間地域になるということが言えるかなというふうに思われます。この赤い丸のところが私が調査しているところなのですが、マレーシアとの国境の南タイですね。タイの場合には約95%ぐらいが仏教徒というふうに言われていますが、ムスリムが5%ぐらいで、ムスリムは主にこの南タイに多く住んでいるということが言われています。

その中でも、東海岸の4つの県がタイ南部国境県と言われていて、東海岸の3つの県は、マレー語を母語としているムスリムが多いんですね。私が調査している、サトゥーン県という西海岸、この県は、タイ語、イスラム教徒と仏教徒も同じタイ語を話しているというところになります。

そこでのイスラム教徒と仏教徒というのがどういうことであるかというのを簡単に言うと、実はこれ、30年前と現在ではかなり状況が変わってきている感じもある一方で、同じようなところもあるのですが、30年前に私が初めて村に入った時は、ムスリムも酒飲みが多くて、よく宴会を一緒に、仏教徒ともやっているというようなことで、そういう意味では、必ずしも宗教的ではない状況でした。そういう中で、ムスリムの場合には、一日5回の礼拝とか、それから、金曜日の集団礼拝といって、モスクに行って、みんなで礼拝する日があるのですが、漁業を生業とする人が多く、大潮の時にはみんな漁に出てしまって、本当にモスクが閑散としているというような状況でした。

この状況がちょっと変わってきたのが、2000年代ぐらいに、マレー語ではダクワ、タイ語でダツフと言いますが、イスラム復興運動というのが入ってきて、やっぱりお酒を飲むのは駄目だとか、原点回帰ですね。よりちゃんとイスラムの実践をやりましょうというようなことで、それまでいっぱいお酒を飲んでいたような人というのは、ちょっと表では飲みにくくなってしまって、裏で飲んでいる人は相変わらずいるのですが、あとは、村のムスリムの女性がベールを誰も着けていなかったのですが、今では、ムスリム女性、村の中では着けてないことも多いのですが、村から外に出る時にはベールをするというようなふうになんか変わってきているという状況があります。

上座仏教の特徴といいますのは、タイの場合は、男性は一生に一度は出家すべきと言われていて、お坊さんは女性と触れ合ってはいけない、つまり女性と接触してしまうと戒律に背くことになるわけです。日本では、お坊さんも結婚して、子どもがいてということもよくあるというお話をすると、それ本当にお坊さんか？というふうにタイ人は言ったりするのですが、それは上座仏教と大乘仏教の違いということになります。

ここに書いてあるようなことというのを、この次のスライドで写真をお見せしながら説明していきたいと思います。

まず村の状況なのですが、こういうマングローブ林のところに村がありまして、そして、これは竹で、簡素な竹で壁を造って、屋根はサゴヤシでふいてあるというようなことが昔は多かったです。そういう家ですと、こういうふうに住居を引っ越しをする時にも、担いで引っ越しをすることができるというのがありました。私、実は、これ一回しか見たことがなくて、文献では読んだことがあって、どんなふうにするのだろうと思ったら、たまたま引っ越し中に見かけたので慌てて写真を撮ったのですが、でもこれ以降見ることはなかったです。今ではコンクリートを床に引いたり、木造もがっしりしたりして、こういう引っ越しは無理になっています。

この村の生業というのが、当時は大きく2つありました。一つは炭焼きです。マングローブというのが、重くてとても良い墨になります。なので、南タイからペナンのほうに輸出をしているということがあったのですが森の木の伐採禁止令をタイ政府が出したので一たび禁止令を出したから即座に止まった

かと思ったらそうではなく、10年ぐらいはやったりしていたのですけども一到頭もう無理になって、今では炭焼きは行われていません。

主な生業というのは、こういうマングローブのところでの漁業、小規模なエビ漁なんかが多い。小さい船で1人から2人でやるのですけど、これもまた漁法に問題があって、今、政府が、例えば、ボンバーンといわれる漁法は小さいエビまで取ってしまうので駄目だと禁止して、それで攻防戦が続いているということがあります。でもやっぱり、こういう形でのエビ漁というのは漁法と変えたりして今でもやっています、取ったエビには色んな葉っぱとか他の小魚が混じっているので、仕分けするというようなことをして売ります。

村は、イスラム教徒と仏教徒が半々ぐらいと申し上げたのですけども、村にはお寺が1つ、それからモスクが1つあります。お寺は、村の入り口のところに、私の最初のスライドでお見せしたような岩山があって、それが村のシンボルにもなっていて、そこの麓に洞窟があって、その洞窟の中にお寺があります。こういうふうには、月に2回、仏教徒は行きます。お坊さんは午前中しか食事ができないので、そこで朝、午前中にお坊さんが食べた後に、みんな持ち寄ったものを一緒に食べるというようなことをやる。

もう一つは、洞窟の中に、これはトナンというふうには呼んでいたのですけども、村の神と呼ばれる、みんなが願掛けをします。これはムスリムだというふうには言っていて、お願いがなかったお礼参りはムスリムの集団礼拝日の金曜日にするということになってます。お願いの大きさによっては、水牛だったり、鶏だったり、色々なお礼の品を持ってお供えをするのですけども、その時にもムスリムだから豚は駄目とか、お酒は駄目とかいうことはあります。その時に同時に必ず爆竹を鳴らすので、金曜日になると今でもよく爆竹の音がパンパンパンとするというような存在です。ムスリムは偶像崇拜禁止ですので、タイのイスラム委員会から問題視されて、ちょっと騒動が起こったということもありました。

これは、私が最初に居候させてもらっていた家のお母さんで、元ムスリムで仏教徒になっている人です。こうやって、仏教徒は、朝のお坊さんが托鉢して回るときに布施をするということで、後でこの人の話はちょっと出てきます。

これは、ムスリムの男の子は一人前になる儀礼だということで割礼をしますが、この時は、数人の男の子、7~8人かな、お祭りのような感じで村を練り歩いた後に、こうやって割礼をしています。割礼を行う人は元仏教徒でムスリムになっている保健所のお医者さんでした。こんなふうにして切るんですけども、昔は切った後に縫わなかったので治りが悪くて、おしっこする時に痛い時期が長く続いたというのですけども、今はちゃんと皮を縫うので割と早く治るそうです。

一方、仏教徒は一人前になることをどういうふうにかと思ったら、まず、タイの場合では、男性ならば一生に一度は出家すべきというふうに言うのですけども、出家することによって一出家というのは20歳以上でないとできないのですが—それによって一人前になり功德を積むことができるということです。黄衣(おうい)をまとい、こういう形で出家儀礼を行う。これが先ほど持っていた、布施をもらうための器になります。

これは、結婚式はニッカといって、タイの場合は一夫一婦制で、公式に登録できるのは1人ですけども、イスラム法では4人まで正式な妻として認めるということで、タイの場合もイスラム法にのっとって、4人まで、ただ、役所に登録できるのは1人だけとなります。

今日のお話で重要なのは、実はお葬式の話です。お葬式というのは、イスラム教徒と仏教徒が大きく違うところになります。ムスリムは火葬をすることはいけないので必ず土葬しなければいけない。こうやって体を洗淨した後で、白い衣に包んで土葬します。一方、仏教徒は火葬をするわけです。

これは私がはじめて村に入って3カ月ぐらいの時に村の助役さんが甥に殺されてしまって、遺体が田んぼで発見されました。その時の様子です。こうやって体を洗って、それで、仏教徒の場合は一番良い服を着せるといいますね。例えば公務員だったらカーキ色の公務員の服というのが一番良いというふう。この人は助役さんだったので、こういうカーキ色の服を着て、それで大体、村でも偉いお坊さんと

か、国王も1年とか長く安置します。普通は5日から1週間ぐらい。当時はまだ電気がなかったので、こうやって遺体を安置していると当然肉体が腐ってにおいがしてくるのですが、その横で、1週間なり5日なり、お葬式をやっている間にみんな毎晩来て、お坊さんが読経に来て、そこで飲み食いしたりするということがあります。

これは火葬の様子です。この人は中国系だったので豚の丸焼きがありますけども、火葬をします。土地の神様にそこを使うことを乞うて、それで、こんな形に薪を積んで火葬。今はもう火葬炉が隣村のお寺にできているのでオープンではやらなくて、火葬炉の中に入れますけれども、こういうふうに火葬する場合には一晩かけて火葬して、翌朝、骨を拾うということになります。

村のムスリムと仏教徒の関係なのですが、実際に、今でもこの割合はあまり変わってないのですが、イスラム教徒と仏教徒が約半々に住んでいる村で、全婚姻数の中で約20%ぐらいは、ムスリムと仏教徒の結婚というのがあります。だから、改宗というのは、結婚をすることによって改宗する。その場合には、どちらに改宗するかというのはケース・バイ・ケースになります。

この地域の特徴というのは、例えば先ほど地図で見せた東海岸の方だと、ムスリムが仏教徒になるというのは非常に大きな罪になるということで、コミュニティから追い出されるとか、家族から縁を切られることもあるのですが、この地域、トランとか、私の調査しているサトゥーンの地域では、ムスリムから仏教徒になることもたくさんある。それよりは、夫婦が同じ宗教でなければならないということ結構気にします。

その時に、宗教というのは一体何かというと、イスラム教徒も仏教徒も、良い行いをすれば良い報いがあり、悪い行いをすれば悪い報いがあるということを言います。宗教というのは、タイ語ではブンー 功德とバープー 罪の観念を知ることであって、それは心の拠り所であるといえます。そういう意味ではイスラム教徒も仏教徒も同じなんだという説明を、両方からされます。

ただ、何が違うかというと、イスラム教徒と仏教徒は方法が違うのだと。その方法というのは、パーサー・ケイ（ムスリムのやり方）、パーサー・タイ（仏教徒のやり方）と現地の言葉で言いますが、パーサーは、標準のタイ語で「言葉」という意味で、古い言い方では「慣習」という意味も出てきます。具体的に何が問題になるかというと、これは、先ほど申し上げた、葬式で人が死んだ時に土葬するか火葬するかというが、改宗者の場合に大きな問題になります。

だから、改宗者が一番気にすることというのは、死んだ時に遺体をどうするのかということになります。それで、例えば、イスラム教徒から仏教徒になっていたある男性、この人はもう亡くなりましたけど、当時、飲んだくれで有名だった人で。奥さんが、旦那さんと話をしている時に、「誰が先に死ぬのか分からないから、酔っぱらっていない時にどうするかはっきりさせておくと安心だ」というふうに言ったら、夫の方は、「死んだらイスラム式だ」というふうに言うわけです。

しかし、妻は戻って、ムスリムとして死んだとしても罪は重い。つまり、一回改宗しているからといえます。やはり罪であるという意識はあるわけですね。棄教した、イスラムを捨てたということで。けれど、そこで戻って死ぬとそれが相殺できるという考え方をしていまして、きちんとムスリムとして埋葬してもらうこともできるのということを言います。ただそれができる条件としては、子どものうちの誰かがいること、つまり、子どもがみんな仏教徒になっていたら駄目だけでも、そのうちの1人でも、またムスリムと結婚してムスリムになっている場合はできるといえます。そういう場合は一彼の場合はそういう人がいたので—それができるのだからということを主張していた。これは、カム・ピー（霊の言葉）という死者の遺言として、やっぱり守るべきだというふうには一応考えているということがあります。

それで、実はこの死ぬという時には、遺体のそういう処理、火葬か土葬かというのも大事なんですけど、もう一つ、実は私が調査していて、すごく重要だというのが分かってきたことがあります。それは、遺体に触ることができるかどうかということです。それをすごく気にするんですね。人が死ぬ時には、つまり、遺体をどういうふうに扱うかといった時に、例えば先ほどの私が一緒に住んでいたというお母さんですけども、元ムスリムで仏教徒になっていたんですが、20年近くにわたって迷っていたわ

って今もうほとんどいらっしやらないんですね。80代、90代で、あと、実際に活動している人は50代ぐらいの人が2~3人しかいなくて、後継者がいないというような状況ですけれども、でもその若手のイタコさんにインタビューして描いた漫画がこの『八戸イタコ紀行』なんです。その中で、漫画家の山本まゆりさんが、亡くなったらその人とのつながりが切れるわけでもない、ずっとずっとつながっているのです、これからもずっと、私たちはなかなかそれに気付けないけれども、松田さん（これがイタコさんなのですけど）のような方によってそれに気付かせてもらえるんだなと思いました、と書かれていました。私も最近恐山に行ってきた、自分の中にある死者の存在というのをちょっと感じたということがありました。

ご清聴ありがとうございました。

中林 広一

神奈川大学アジア研究センター所員・国際日本学部准教授〈文化分野〉

私は国際日本学部の教員を務めておりまして、専門は歴史学、中国の歴史学研究をしております。最近は食文化を中心とした文化研究ということもやっております、今回、文化のパートではこの食文化に関連した形でお話をさせていただきたいと思います。

タイトルが、「文化の中の日常」ということで話をしておりますが、文化という言葉は、皆さんにとってかなりなじみのある言葉だと思います。なじみのある言葉なのですけども、どのようなものが文化なのか、あるいは、文化ってどのような特徴を持っているのかという点については、そこまで深く考えた経験がある人もそう多くはないと思うのです。ただ、いろいろ考えてみると、文化というのは結構面白いところがあって、例えば、流動性、可変性、どんどん変わっていく、そういう性格の強い存在であると。

日本の文化というと、皆さん何を思い付くでしょうか。例えば、歌舞伎とか、書道とか、和服とか、こういったものが基本的なところだと思いますが、これが、昔からずっと日本に伝わってきたのか、同じ形で伝わってきたのかということ、必ずしもそうではない。むしろ、100年、200年って、ずっと同じ形で続いてくる文化、それを探すが難しいという話でして、今ここに挙げている、歌舞伎や和服なども遡れば遡るほど、全然違うスタイルになってくるわけです。歌舞伎は、女性が始めたものに起源が求められますし、和服も、今の和服とは違う形になっています。

そして、こういうさまざまな変遷を経て、今、私たちが知っている文化の形になっているわけですけども、当然、日常をつくり上げるさまざまな文化も例外ではないわけです。そしてここを探っていくと、色々面白いところがあるというお話になってくるわけですが、食文化を私が研究しているので、食べ物でそうした事例をいくつか見ていきたいと思っております。

今見てもらっているのは、吉野家のホームページから持ってきた朝定食の写真です。皆さん、日本の平均的な朝食として思い付くものって大体このような感じだと思うんですね。ご飯があって、みそ汁があって、魚、卵、納豆、ノリ、これに白菜の漬物でも付けばもう完璧な日本の朝食であると、私たちの日常の一部であるというふうにも思うかもしれませんが。

ところが、これが日常だというのは今だから、そして日本だからというふうには言うことができる。特に、かつてどうだったかということを見ていきたいわけですけども、例えば、左下にご飯があります。白米、これ、私たちにとって何のこともない、ありふれたものですけども、50年前、60年前、遡っていくと、白米を毎日食べられるという生活が日常ではないわけです。白米というのはかなりのぜ



いたく品でして、かつての日本社会では、ご飯に、例えば大麦を混ぜるとか、あるいは、芋とか大根を混ぜるという形で、白いご飯だけをそのまま食べるというのは、非常に非日常的なことである。

同じようなことが、例えば、卵とかサケにも言えます。これも私たちにとって何のことはない、安く買える食材ですけれども、高度経済成長期以前、1950年代、60年代以前は、非常にぜいたく品です。病気になった時でないとか卵を食べさせてもらえないとか、何かいいことがあったとか、お祭りの時とか、そういうシチュエーションじゃないと、サケとか肉といったものは食べられない。そういう意味では、これも非常にぜいたくな品ということになります。

それから、納豆とサケのところには、地域性という言葉が書いてあります。地域性とはどういうことか。ここで話を聞いている学生の人たちはほとんど東日本出身なのであまり自覚することないと思いますけれども、サケというのは、基本的に東日本でよく食べられる魚です。最近だと、西日本に行ってもスーパーでたくさんサケは並んでいますけれども、かつてはサケというのは東日本の文化であって、西日本はブリとかタイとか、他の魚を食べています。そうすると、朝ご飯にサケが出てくるという生活は、西日本の人たちにとっては日常ではないわけです。同じようなことがこの納豆にも言えて、納豆も、時代を遡っていくと、一部の都市と、あとは東北地方でよく食べられる食材です。こんな感じで、同じ日本の中でも地域性というのがあって、日常の中身というのは違うわけですね。

もうちょっと言うておくと、この納豆というのは、納豆菌を管理しながら作っていかねばならないので、素人が作ろうと思ってもなかなか難しい。要は、大量生産が難しいので、今、皆さんがスーパーに行って、納豆を買うなんていうことができるのは、製造管理の技術が確定して、大量生産ができるようになったからです。だから、スーパーに納豆が並んでいるという日常も、実は、今だからこそあり得るものだと言うことができます。

このような感じで整理していくと、今ご覧いただいているスライドのような形になりますが、自分が金持ち、あるいは貧しい階層、どちらに属しているかによって日常か非日常かは変わってきますし、それから先ほども申し上げましたが、時代によって、今だからこそ日常であるものも、60年前、70年前、遡っていくと日常ではない。そして、地域によっても日常ではない。という形で、今この瞬間に私たちが日常さと思っているものも、地域とか時代とか自分の立場、そういったものをちょっと変えてみると日常ではないという可能性が出てくるわけです。

今した話をまとめていくとどうなるのかというと、日常というのは、私たちにとってすごくありふれています。ありふれていますけれども、これは実は様々な条件の下でいろいろ変化してきたもの、あるいはつくり上げられているものであって、いつでもどこでも日常というわけではない。私たちが日常と思っているものは、結構色々変化した上で、今、自分たちの目の前にあるのだということを理解してもらいたいと思います。そして、今日のテーマは「アジアの日常」ですが、このアジアという枠組みも、私たちの日常をつくり上げる条件の一つになっているものだということも覚えたいもらいたいと思います。

今見てもらっている写真はトルコ料理です。トルコ料理のマントウという料理です。ぱっと見だと分かりにくいのですが、小麦粉で作った薄い生地挽肉とかそういったものをこねて作り上げた具を包んで、そして茹でる。それをトマトソースとヨーグルトで味付けをしてという、こういう食べ物です。これ、日本のトルコ料理店でも出している店がありますので、食べたいと思えば食べられるわけですが、この小麦粉の生地で具材を包む、似たような食べ物を見たことないか。今見てもらっている食品は、まんじゅうって私たちは読ませますが、中国だとマントウと読ませます。今の中国のマントウは具材が入ってないのですが、古く遡ると、いわゆる私たちの知っている肉まんみたいなものが、昔は中国でマントウの名前であったわけです。どうですか？ 小麦粉製の生地を餡でくるむという作り方と、名前がやたら似ています。

これは、資料がないので確定させることはできませんが、恐らく、遊牧民起源の食文化であろうと考えています。遊牧民の食文化が、中央アジアあたりから東へ西へって伝わっていく、その結果として、西のトルコのマントウ、ウズベキスタンのマントウイ、トルクメニスタンのマンティみたいな形で、似

たようなタイプの食べ物が出来上がってきます。東に流れていくと中国のマントウ、それから朝鮮半島に行くとマンドゥというスープギョーザみたいな形になってきます。日本だけ甘いまんじゅうになっていくわけですが、こういった形で文化が伝わっていくという現象があります。

今してるお話はどこら辺がポイントかと言ったら、アジア内での移動、交流ということになります。例えば、商人であったり、あるいは遊牧民、あるいは海を生活の拠点にする海民、こういった人たちがキーパーソンになって、色々な地域の文化が伝わっていく、そういう現象が起きていく。文化要素の伝播、それから、受容、定着、こうした現象が、アジアの中で交流を通じて生じている。そしてその結果として、私たちは今、まんじゅうを食する機会を得ている。ギョーザなどもそうです。ギョーザも恐らく、中央アジア起源で伝わってくると。というところで、われわれが普段日常的に食べているもの、これが実は、アジア内での移動とか交流、その結果として受容しているものなんだということが、一つポイントになってきます。

それから、アジアというところでもう一つ注目したいのは、植民地という経験です。日本は植民地にはなっていません。あとタイもなっていませんね。ただ、ほとんどのアジアの国々は、欧米諸国の植民地、あるいは日本の植民地になったという経験があります。そして、これが文化にも影響を及ぼしているわけです。植民地も、功と罪、罪の部分のほうが多いとは思いますが、こうした食文化に植民地時代の名残が見て取れる。

今見てもらっているものはバインミーという食べ物です。日本でも最近出している店があるので食べたことあるという人もいるかと思いますがこれはベトナムの料理です。フランスパンにベトナムの食材を挟んで食べる、そういう食べ物で、ベトナムの街角でこうした形で売られています。冷蔵ケースがありますけれども、その中はこうやって具材がいっぱい並んでいて、自分でどの具を挟みたいかって選んで、パンに挟んで食べさせてもらうわけです。フランスパンとベトナムの具材という組み合わせになっていますが、これも、ベトナムが19世紀にフランスの植民地に組み込まれたことがきっかけになっています。仏領インドシナに、ラオスとかカンボジアと共に組み込まれていく、こうした経験を経ていく中でベトナムに定着していった文化だと言えます。

それから、今見てもらっているものが台湾での屋台の食です。黒い輪と書いて、これでオーレンというふうに読ませますけれど、これは何かというと、おでんです。左の方の写真を見てもらうと、なんか私たちの知っているおでんに近い印象を持ちますが、これも日本の植民地時代に台湾に伝わって行って、そして台湾風のアレンジが加わって、今、夜市とか、台湾の色々なところで食べることのできる文化になっています。

ということで、アジアというくくりで見えていくと、アジア内での移動、交流というポイント、あるいは、植民地という経験、こうした要素が一つ、考えるヒントになってくると思います。特に植民地については、バインミーとかおでんのように、宗主国の影響を受ける文化という意味において、歴史とすごく深く関わりのあるトピックだということが分かると思います。

その意味では、「アジアの日常」という今回のテーマでありますけれども、ここを考える時の一つのヒントというのは、歴史にあるのではないかなと考えています。歴史というのは、現代に生きている私たちにとってあまり縁のないものと捉えがちかもしれませんが、歴史に対する理解というものを深めていくと、社会が見える、あるいは文化が見える。そうした部分を踏まえますと、アジアとか日常というトピックを捉える時も、一つの見方の広まりになっていくと思いますので、最後に、ここの部分だけ強調して、私の報告を終わらせたいと思います。どうもありがとうございました。

荒木田 勝

アジア防災センターリサーチフェロー 〈科学技術分野〉

皆さん、こんにちは。アジア防災センターの荒木田と申します。こちらのアジア研究センターができて10周年ということで、非常に良いことだと思っております。私どもは1998年にできて今年で25年

経っています。そのうち23年ほどアジア防災センターで活動しておりまして、今、メンバー国32カ国あるうち25カ国には実際に行ってきました。

このタイトルですね。「アジアの日常」という切り口をお話していただきたいと言われた時に、最初かなり困りました。というのは、アジアって広いですよ。人口も多いし、面積的にも広がりがあるし、熱帯があるし、砂漠もあるし、寒帯もあるしと、気候も全然違います。主

食も、米を食べる人もいるし、豆を食べる人もいるし、麦を食べる人もいる。豚が駄目な人もいるし、牛は神聖だから食べてはいけないという人もいるし、何でもウエルカムだという人もいる。宗教も、他の先生方のお話にあるように様々な宗教があって、対立もあると。お酒が良い国、お酒が駄目な宗教、駄目な宗教のはずだけれどもみんなが飲んでいる中央アジアとか、本当に様々あって。

この間数えたら、アジアを含めて全世界で今70カ国に行っていました。アジア以外は、JICAの専門家の仕事で行ったのですが、色々な地域の、赤道に行ったりとか、モンゴルではマイナス40度の世界を体験して、歩いているうちに目がどんどん閉じてくような怖い思いもしたのですが、その中でも中米ですね。ここで3年間長期専門家として赴任した時に、その国の流儀に従って何をできるのかということ学んだような気がいたします。

繰り返しになるのですが、アジアは広くて、一口に全然言えない。初めて行った国はインドネシアだったんです。そうしたら、そこがまず空気がねっとりとしていて、蒸し暑くて、スコールの後すごく気持ちが悪くなって。食事は辛かったり、一緒に出てくるのがビールではなくて、マンゴージュースとかココナツジュースとか、こういう組み合わせがあるのだとか、本当に異文化に接した瞬間というので、何もかも新鮮で。ブータンに行ったら日本の原風景みたいな感じだったし、インドに行ったら、少女が一日3回水汲みするのが自分の仕事だと言っていたり、アルメニアに行ったら、建物が危ないから、地震があったら揺れが収まるのを待たないで一刻でも早く、30秒以内に学校の外に走って逃げるのだと、これが防災教育と言われてショックを受けたりと。日本の常識と世界の常識、その違いというのを、何度も何度も見ていて、学ぶことばかりです。今でもそうですね。

ここ25年、アジア防災センターのプロモーションみたいになってしまうのですが、どれくらいアジアが変わってきたのかというと、エリア全体でGDP4.7倍、人口は約1.4倍というくらいの伸びをしていて、色々な違いはあるものの、全体的に伸びているというのはもう明らかだと。GDPの伸びを見ると、中国、アゼルバイジャンを始めとした（地図で）ちょっと色の濃いあたり、これは10倍以上の伸びというようなことで、ものすごい経済の躍進が著しいというのがよく分かります。だから、できた時は私たちが全てお金とかを払って、人を集めなくていけなかったような時代が、彼らの国が自分たちでお金を出すから日本で研修をさせてくれとか、経済的には本当に追い付かれたなという気がいたします。

災害ということで見えていくと、アジアって、実際、災害が多いんです。過去30年を見ると、主要災害の8割くらいがアジアです。種類も多いです。地震だけではなくて、台風、サイクロンですね。津波もあるし、地滑りもあるし、異常気象、高温とか異常低温とか、そういったものもあるし、本当に災害のデパートのような地域です。実際、被害者数を見ても、約半数がアジアの被災者です。

ではなんでこんな所に住んでいるのだという話、やっぱり考えてくると思うのですが、人がそういう危険なところに住んでいるからなのですよ。住んでいるから、そこを、日本だと、災害が起きないように一生懸命頑張る、街を強くしようと、どんどん防災の投資をするわけですが、できない国だってあるし、お金がない中でどうやっているのかということを見てくと、みんな頑張るってそのリスクと共存している。



例えば、ここに出ている写真だと、全然堤防がない。こういう街いっぱいあるんですね。これは23年前に私が初めて行ったインドネシアですけど、でも、その中で、床をかさ上げしていたり、こういう通路をちょっと高くして、水が来ても歩けるようにしたり、それ以上浸水してきたらこの船を使って、出ていったり。なんでこんな所に住むのかといたら、彼らの職業が農家で、周りが水田で、洪水の水が豊かな栄養ももたらしてくれると。そういった所に住むからこの仕事ができるのだというので、共存していたりするわけです。だからこれを害として捉えるのではなくて、1年の間の季節的な変動として見て、この時期は水が上がるね、だから対応していこうねというような、そういう歴史、文化なのですね。

では地震はというと、これ、今年も起きて、皆さんもニュースとかでいっぱい見ていると思いますけれど、トルコとシリアの国境付近で発生した地震の事例です。こちらが被災中心地なのですけれど、この下の平野部のところ、壊滅的な被害を受けて更地になっています。非常に危険な建物がたくさんあったのですけれど、どんどん解体しています。逆に、奥の方に見える山の斜面に建っている地域というのは、多少の被害は受けたものの、全壊家屋というのはほとんどなくて。何が違うかということ、向こうは古くからの街で、こちらは新たに開発してきたところだと。結局は、歴史的に地震が繰り返される場所では、地盤の固いところに集落が形成されて、そこを中心に発展していったと。それが、歴史的な教訓、共存という手段だったのですね。

右側（の写真）でも、地盤が軟弱で古い構造の集合住宅というのは、本当に全部壊れていて、奥にある建物も爆破解体する予定というふうに言われていました。一方で、下の写真は地震の前に造っていた耐震住宅ですけど、地盤も良かったのでここは被害がなかったということを考えると、地震のリスクのある地域というのは、やはり、元々良い地盤を選んで街ができていたということを学ぶことができます。

歴史的な共存とは別に、ちょっと科学技術っぽいことも話そうと思うのですけれど、20年前、私がアジアに行き出した時、まず、アジアの国の地方に行くと、電話なんか誰も持っていませんでした。電話の線が地方まで全然引かれていなかったのです。日本はどこの地方でも電話が通っていましたけれど。だけど、その代わりに、アジアの諸国というのは携帯電話の普及率が非常に高かったのですね。あっという間に普及しました。アンテナ1本立てればそれから何キロ範囲は全部OK。今、得られたデータで分析すると、大体82%くらいがアジア各国で携帯電話を持っています。ほぼ100%の国もたくさんあります。さらに、SNSですね。日本だとLINEが非常にメジャーですけど、アジアだとLINEがメジャーなのはタイくらいで、あとはWhatsAppと同じようなSNSが使われていて、これが大体平均で60%くらい普及しています。こういったものを使って情報を伝達する仕組みというものが、今、注目されている。

なんでこれが関係するかというと、私のやっている防災でいくと、日本だと、災害が起きると、NHKとかテレビですぐに、避難してくださいとか、L字型に情報が出たり、あとは、携帯電話でピーピーって鳴ったりとかと、そういった既存の行政からの仕組みが使えるわけなのですけれど、あとは防災行政無線でスピーカーから流れたりもしますよね。そういったものがない国では、このSNSを使って、防災対策、避難と、early warningといったものもやろうというような試みが上がってきています。

これはタイの事例ですね。タイでは、普及しているLINEを使って、災害情報、警報を出したり、逆に、住民が、あそこで火事が起きているよとか、そういったものをレポートする仕組みといったものが使われ出しています。こういったものが、今後、アジアの各国で普及可能性あるんじゃないかと私たちは見えています。

実際に、SNSを使った防災情報システムというのを私たちもやってみました。WhatsAppとかLINEでできるのですけれど、集まった情報をパソコンで、Web GISで管理できるようなシステムです。どこから情報が来ましたかと、どんな情報ですか、それは今後どのような対処が必要ですかというようなことが分かりやすくてできる。災害対策本部にこれを一つ置いておくと、現地の情報がどんどん集約さ

れてきて、それに対して個別に指示ができるというようなものになります。日本は既存のシステムが出来上がっているのですが、これに切り替えなければいけないということはないんですけど、それが無い国々、自治体においては、こういったシステムを使うことによって非常に安価に災害情報の収集とか、early warning といったことが実現するシステムということで、有望だと思っています。私たち、今、ASEAN でこの取り組みを広めようと、今年から活動を開始しているところです。

これ以外にも、私たちは災害のデータ管理とかいうのも進めて、世界で発生する全ての災害に対して、災害種別、発生年、シリアルナンバー、国番号というのを付けて、同じ災害についての情報を集めやすく、そして異なった情報、災害の情報が錯綜しないような取り組みというものをしています。今これが国連のデファクトスタンダードの番号となっています。例えば、ある災害があると、色々な機関がレポートを出します。その時にこの番号を付与することによって、串刺しして、関連情報を一気に取ることができる、そういう取り組みです。さらに、災害発生後に、日本だとヘリコプターとか飛行機で被災地の全貌把握というのをやって、それをテレビとか災害本部とかが使ったりするのですが、お金がないような所でも、宇宙の地球観測衛星を使って被災地の状況を瞬時に把握して、災害対策に役立ててもらおうという取り組みを2006年から行っています。直近では、きのうの夜発生したフィリピンの地震に対して、今朝、緊急観測要請が出されて、今、観測を開始しています。多分、明日には画像提供が開始されると思っています。これは防災機関や宇宙機関が社会に貢献する役割としてボランティアで行っているもので、毎年毎年、高い評価を受けております。

本当に広いアジアですけど、経済発展は著しいです。その一方で、地方に行くと二十何年前と全然変わらない風景もあります。それらに対して、私たちは、科学技術をもってサポートしていきたいと思っています。けれどそれは決して押し付けではなくて、どういう未来を求めるのか、どういう生活をしていきたいのか、それに対して日本は何ができるのか、そういう対話で共感しながら考えていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

意見交換（敬称略）

中林：意見交換ということで、今、先生方に前に出てきていただきました。Lam 博士のご講演、それから、先生方のコメント、そうしたところを伺っておりますと、同じ日常というテーマでもさまざまな切り口があるということが、皆さま分かっていただけたかと思います。本当に多様な形で日常というものを捉えることができ、非常に刺激的なお話がたくさん伺えたわけですね。もう一つ、皆さまにご注目いただきたいのは、やっぱりアジアという言葉に対する捉え方です。先生方にはいろいろな形のトピックでお話しいただいておりますけれども、やっぱり広くアジアを捉えてお話しされる方、それから、非常に特定の地域に限定してアジアをお話しいただく先生、このように、アジアも非常に多様な捉え方ができる。これは言ってしまうと、アジアというのは非常に曖昧な言葉ですし、それ故に、使い勝手のいい、いいかげんな使い方も可能な言葉ということになります。私たち、アジア研究センターとしても、アジアを対象としてこれからも研究してかなくてはならない時に、アジアをどのように捉えていくのか、研究していくのか、こうした点は非常に大切なところになってきますので、先生方に、このアジアという枠組みについてどのように捉えられているか、そこをお伺いしたいと思います。順番としては、発表順ということで、まず青木先生から、右側から順にコメントを頂きまして、最後、Lam 先生にコメントを頂くという形で進めてまいりたいと思います。それでは青木先生、よろしく願いいたします。

青木：中林先生、ありがとうございます。非常に難しいテーマで、どう言ったらいいのか迷うところではありますが、私の勤めておりますアジア経済研究所の名前から、ちょっと話を起こして、短くまとめたいと思います。私たちのいるところは、アジア経済研究所というんですが、実は、研究対象は、ラテンアメリカ、それから、アフリカも入っております。これは、ラテンアメリカやアフリカもアジアだと主張しているわけではなくて、後から広がってきたという経緯があるのですが、それでも、日本

名、英語名は Institute of Developing Economies なのですね。要するに、途上国を研究対象とするというのがわれわれの研究所のミッションなのですが、それでも、日本名をアジアから変えなかったところには、アジアというところに途上国という意味合いが強く込められていて、そこを研究対象とする研究所であるからだというのがミッションであるという経緯があったと思います。

ここから私がいつも思っているのは、アジアというのは、何らかの地理的な、あるいは、アジア人と呼ばれる人間の実態が伴う集合概念だと思うのですけれども、何をもってアジアとするのかというのは、中林先生のお話にもあったとおり、非常に可變的で、文脈によるところが大きくて、使い方が非常に難しい。その一方で、アジアであるということで、例えば、アジアじゃないもの、それは、ヨーロッパであったり、あるいは先進国であったりするのかもしれませんが、そういったものとの差異を強調する、そこに何らかの意思が込められる場でもあると思います。

私は今回、タイという一つの国だけを取り上げて、アジアの事例の中の一つというふうにしましたが、やはりここから敷衍して話すには限界があるので、もうちょっとアジア的な視点ということに目を配っていくのも必要だなと思った次第です。以上です。

魚住：私は、今日はベトナムにフォーカスしてお話をした、あるいは、ASEAN にフォーカスしてお話をしたのですけれども、私、最近、非常に注目していますのは、ASEAN のメコン地域ですね。ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、ここと中国との、中国の南部ですね、つながりが非常に強まっている。具体例、申し上げますと、ラオスのビエンチャンと、それから、中国の昆明、これが高速鉄道で結ばれました。

それで、物流、人流が、非常に増えているわけですね。一方で、ベトナムのハノイから、中国の重慶も、これは鉄道が繋がってしまっていて、そこから、中欧班列という、中国からロシアの一部を突き抜けて、ドイツのデュッセルドルフだったかな、につながる、これも鉄道なのですね。ハノイから、それこそ重慶経由して、で、中央アジアにもものが動くというような動きが非常に活発化しておりまして、その中国の中欧班列というこの鉄道も、中央アジアを抜けるのですね。カザフスタンが一番大きいのですけれども。

私、そんな延長で、最近、この中央アジア、ASEAN のメコン地域から、中国を通じて、中央アジアに抜ける、この物流に、非常に興味を持ってしまっていて、ですから、私にとってのアジアっていうのは、基本的には ASEAN なのですから、それから、中国、それから、これからはやっぱり非常に注目したいのが中央アジアですね。というような見方をしております。

西井：ありがとうございます。私の研究所も、やはり、アジア・アフリカ言語文化研究所といたしまして、アジアっていうのが付いているのですけれども、私の研究所では、3つの分野の研究者がいて、言語学と歴史学と人類学なのですが、一番、地域枠組みでやりやすいのは、いわゆる歴史、地域研究というところなのですが、言語なんかは、アラスカとか、いろんなところの研究者がいます。ところが、人類学っていうの、ちょっと悩ましいのが、先ほど私の報告の中でも、人類ということ、ある特定地域でフィールドワーク、調査をしているけれども、やはり、人間とは何かみたいなもの考えるって言ったのですけれども、この人類学の枠組みの中でアジアっていうのを区切って、例えば、人、どういう人に来てもらうかっていう時に、ほんとは取っ払いたっていうのが本音なのですから、やはりそれがなかなかできない。アジア、アフリカっていうところで、やっぱり、何らかの形で絞らなきゃいけないっていうところのジレンマがあるっていうのが本音です。

ただ、最近、だからアジアっていうのが非常に可變的だというお話、先ほどの中林先生のお話もあったのですけれども、私たちの研究所でやっているプロジェクトなんかでよく使われる言葉が、人類学の中で、「トランスカルチャー」っていうことを使っています。これは、カルチャー自体が曖昧なのですから、どういうことをやるかといったら、枠組み自体を問題視するというよりも、それを超えていくものを焦点化しようっていうところなのですね。だから、多分グローバル化の中では、いろんな影響とい

うのが、例えば、私の調査村だって世界から入ってきていますし、そういう意味では、何がその枠組みで重要であるのか、だけど、やっぱり、超えていくところっていうのを見ていかななくてはいけないということで、最近はそのようなところを気にしてやろうかなと言っているところです。

荒木田：私の中でも、発表の中でも言いましたけれども、アジアを一口で言うのは非常に難しいのですね。食という観点でいくと、南アジアとか西アジアって、麺は食べるけど、汁麺は食べない、焼きそばは食べるみたいな文化と、中央アジア・コーカサスだと、ひたすらパンを食べる文化、で、東アジア、東南アジアだと米を食べる文化で、全然、成り立ちが違う。じゃあ、よく分かっている、米を食べる文化っていうので見ていくと、みんな、大都市の河口デルタ、扇状地、そういったところに街が発展して行って、そこに米を作って、そこに人が集まって、そういうような成り立ちで都市ができてきて。結局、そこは、洪水の跡地なのですね。だから、何度も、人が集まっても洪水に遭う。だけど、米のためにはそこで生きていかなければいけない。そういうような特性を持っている。

多分、麦の地帯、パンの地帯、そこはそこで、やはりそこじゃなきゃ都市ができない理由があったのだと、そうすると、そこにも固有の災害と向き合わなきゃいけない理由があるのだと思います。だから、みんな、そういう環境リスクと直面しながら、人々は活動しているなというふうに感じて。アジアをうまく定義するのは難しいと考えています。

Lam (通訳)：5つの大変素晴らしいプレゼンテーションを本日聞きました。方法もケーススタディーも違いましたが、共通のテーマがありました。それは、日常生活、そして、アジアにおける日常生活です。それがテーマでした。アジアのくくりとは何かです。もう既に出ているお話ですけども、地政学的な問題、地理的な問題というのは、ただ一つの側面です。最初の3人のプレゼンターの方たちは、特定の国に言及しました。タイ、ベトナム、それから、タイ、それから、ムスリムについて言及しました。中林先生がおっしゃったように、流動性があります。アジアといってもそれぞれの地域に流動性があります。

ヨーロッパを考えた時に、特に、トルコはヨーロッパなのか、あるいは、NATOの一部ですよ。それから、荒木田先生がおっしゃったように、中央アジア、アジアという地理を考えた時に、アジアはライフスタイルと食で分けることができるのか。食生活、それは今日のテーマのひとつでしたけれども、アジアのアイデンティティーというものはあるのでしょうか。そういうものがなければ、アイデンティティーというのは、アイデンティティーに基づいた考え方というのは、主観性があるものなのか。アジアには共通の価値観というものはあるのでしょうか。とても緩いコンセプトだと思います。アジアの価値観、アジアの文化、DNAと民族性はそうなののでしょうか。民族性に、あるいは文化に頼ったのがアジアということなののでしょうか。ユーラシアとかヨーロッパ人かもしれないけれども、アジアに生まれて育てば、そういう人はアジア人なのかな、アジアの一部なののでしょうか。そういうふう期待されるのでしょうか。ラ米でもヨーロッパでも、アメリカ、アジアなどで期待されるアジア人なのか。アジアというのは政治的な概念なののでしょうか。どう思いますか。1970年代、80年代などは、その時は大平首相でありますけども、アジア太平洋概念を打ち出されました。今、インド太平洋の、このコンセプトを出そうとしておりますよね。

最後になりましたけれども、アジアはダイヤモンドみたいなものなのでしょうか？ 原石です。だから、カットして磨かなければいけないけれども、私たちがみんな言ったのは、それぞれの面なのです。ダイヤモンドにはたくさんの面があるでしょ？ それです。だから、一つのアジア、この特徴っていうのはありません。ですから、ほんとに定義をして、そしてまた解釈をし直して、何回も、何回も磨かなければいけません。

皆さま方の近隣の諸国は何ですか。北朝鮮のことはどう考えますか。誰も言いませんでしたね。私はフィールドワークもしたのですけれども、だから、それ自慢するわけじゃないですけど、私、平壤に行きましたよ。開城にも行きました。そして最も世界で美しい山といわれる白頭山も、DMZも、非武装

地帯にも行きました。そして、来年は、パンデミックが終わったら、北朝鮮にフィールドワークに行きます、来年。だから、私は北朝鮮に行った時は6年前ですけども、5月6月でした。その時に、私は、それは特権だったと思いますけども、本当に良く扱っていただきました。あまり食べ物なかったのですけれども、豪勢な食べ物を私にくれました。でも私は、違う惑星に行ったのかと思いました。そして、月の裏側に行ったような感じがしました。

でもですよ。北朝鮮は、朝鮮の半島にありまして、そして、日本に近いですよ。地理的にも文化的にもそうでしょ？ だから、アジアということをする時には、北朝鮮はどこに組み込むのですか。トルコとかラテンアメリカと、それから、中央アジアのことをおっしゃいましたけれども、北朝鮮はどこに、私たちのアジアの概念にはめ込まれるのですか。私のような人は、私は月の裏側に行ったような気がしましたけれど。だから、考えていただければと思います。

中林：どうもありがとうございました。本当は、ここからいろいろ討論といきたいのですが、残念ながら、終了時刻の5時を過ぎておりますので、意見交換はこれで終わります。先生方からいろいろな角度からの意見も頂きましたし、特にLam博士から、磨き続けることが大事だと伺いました。「アジアって何だろうか」という問いについて、本センターでも考え続けていきたいと思っています。

(いしい りさこ 所員 神奈川大学法学部准教授) 編集